

538.06-D25ㄅ



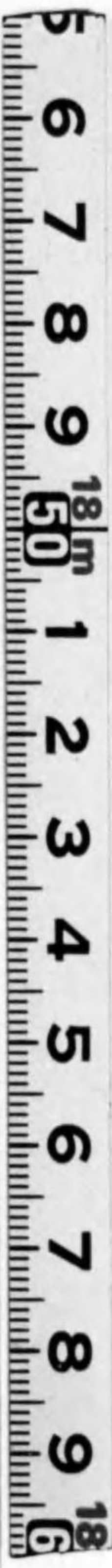
1200500745818

06

5

大日本飛行少年團拾年史

大日本飛行少年團編



始



大日本飛行少年團拾年史

912
154

538.06
D25



大日本飛行少年團拾年史

東條書



Faint vertical text or markings on the right page, possibly bleed-through or a library stamp.

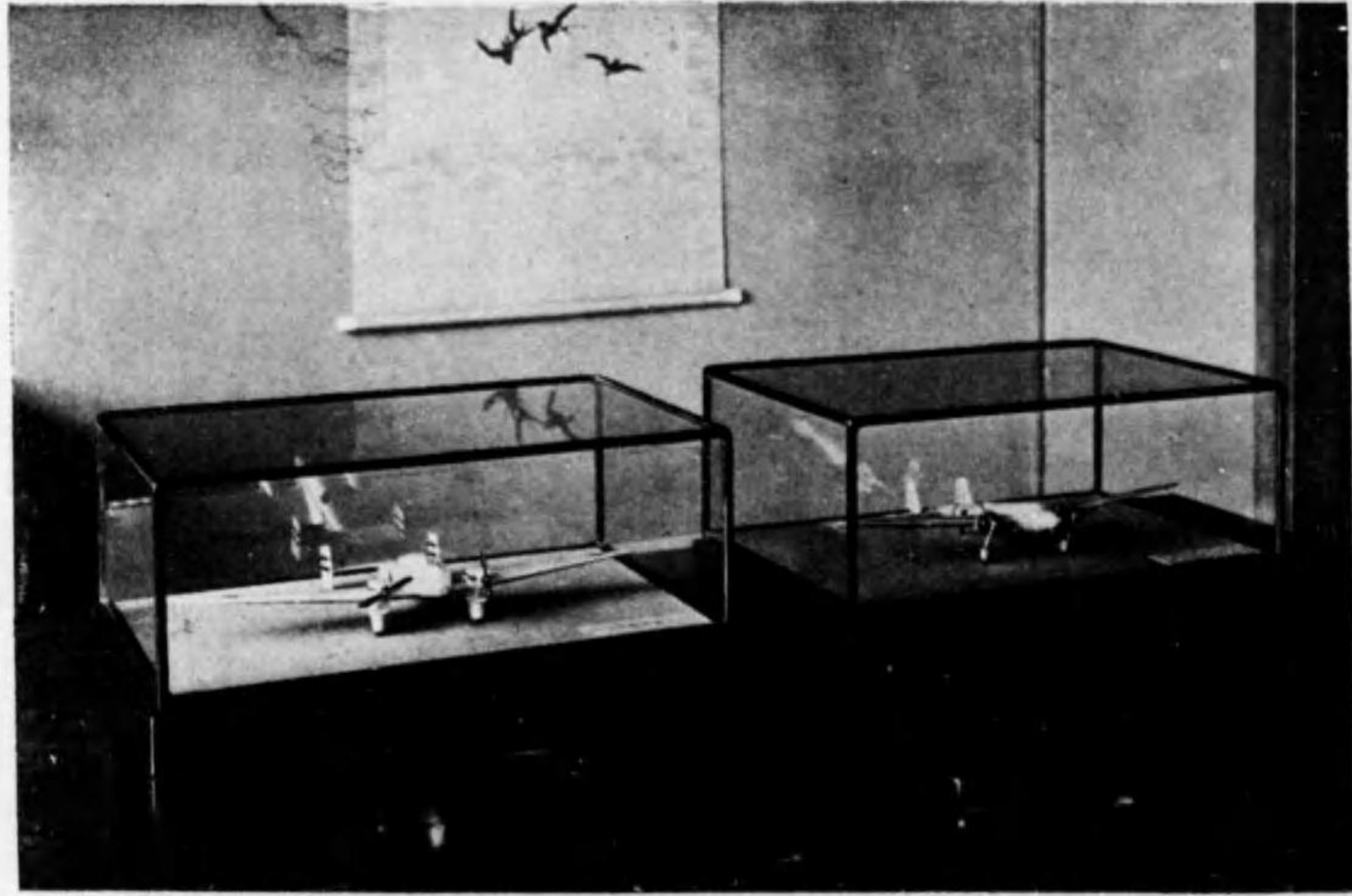
912
154

目次

大日本飛行少年團拾年史寫真(その一).....	五
大日本飛行少年團創立趣旨書.....	一五
大日本飛行少年團々則.....	一八
大日本飛行少年團員宣誓五章及び團歌、グライダー部歌.....	二二
大日本飛行少年團沿革竝に事業概要.....	二四
報國第八十四號(第一兒童號)献納.....	四四
大日本飛行少年團模型飛行機普及事業(大日本模型飛行機聯盟).....	五三
滿洲に派遣せる大日本飛行少年團少女航空親善使節.....	五六
大日本飛行少年團拾年史寫真(その二).....	六七
大日本飛行少年團グライダー部沿革竝訓練經過に對する所見.....	七七
感 謝 狀.....	九八
大日本飛行少年團地方本支部沿革.....	一〇一
大日本飛行少年團指導後援者芳名錄.....	一〇七
卷 末 の 辭.....	一一七

大日本飛行少年團創立趣旨書

東新書



一飛行機模型 貳基

右

皇太子殿下、献上被致候

二付

御前、差上候

此段申進候

昭和十三年六月廿三日

宮内大臣松平恒雄

大日本飛行少年團長
海軍大佐東條政二殿

昭和十三年六月二十日本團より
皇太子殿下に献上し奉りたる機型飛行機



昭和十五年十一月二十三日日本團主催東京市學童模型飛行機競技大會に御臺臨遊ばされたる賀陽宮章憲王殿下（御右）と賀陽宮文憲王殿下（御手にせらるゝは當日本團より献上したる模型グライダー）

昭和十三年六月二十三日日本團大阪本部より伏見宮博義王殿下に献上し率りたる刺繍額「水邊の虎」





本間より海軍に献納せる報國第四十八號一號童號



同上斜方より見た報國第四十八號童號



氏郎一錦島小 長團副前



氏喬昌東安 長團前



氏二政條東 長團



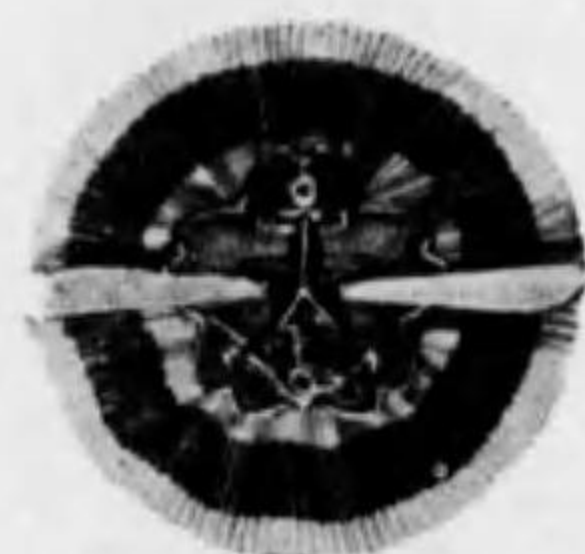
氏雄忠野宮 長團副



氏光 溝野 長事理



旗 團



章員團助贊



章員團功有



章員團別特



章員團正

本園より海軍に献納せる軍用機を報國
第八十四號第一兒童號と命名せらるゝ
海軍大臣代理長谷川海軍次官（昭和十
年九月七日於羽田東京飛行場）



萬歳奉唱（中央白
服東條團長、左へ
島副團長、植田大
阪支部長、小林富
次郎氏）

報 國 號 獻 納



献納者代表として
玉串を奉奠する東
條團長



氏二錠地橋 長部支都京



氏松賀千 岡 事理



氏一喜林小 事理



氏翠 平松 事理



氏郎太市谷神 事理



氏吉麻崎山 事理



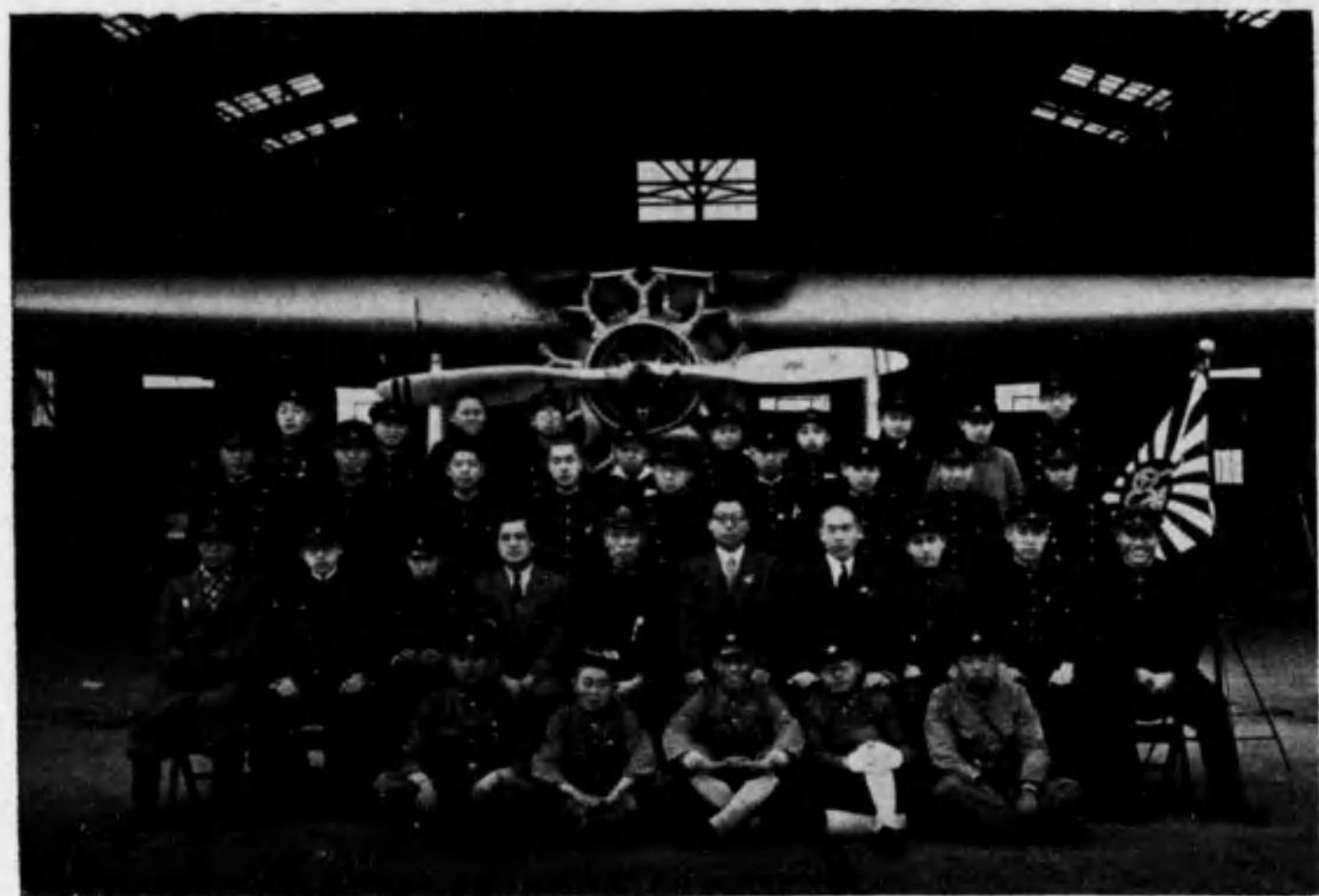
氏八長部阿 事監



氏郎次野平 事監



氏市丈田内 事理務常



(場行飛京東於月二年十和昭) 會學見地實設施空航員團



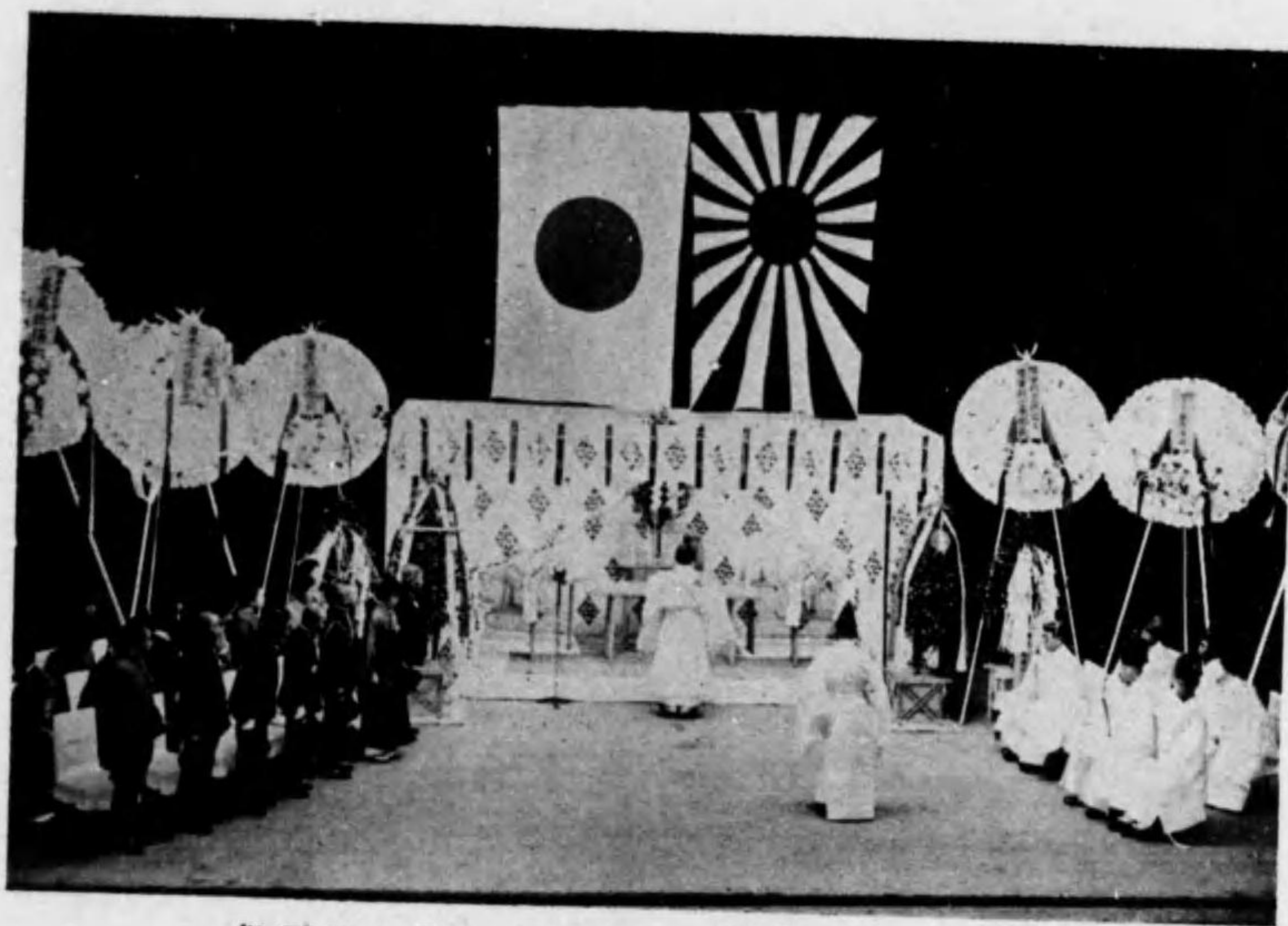
機行飛型模るれなに品作の童兒るけ於に會覽展空航催主團本
(屋坂松座銀於月四年二十和昭)



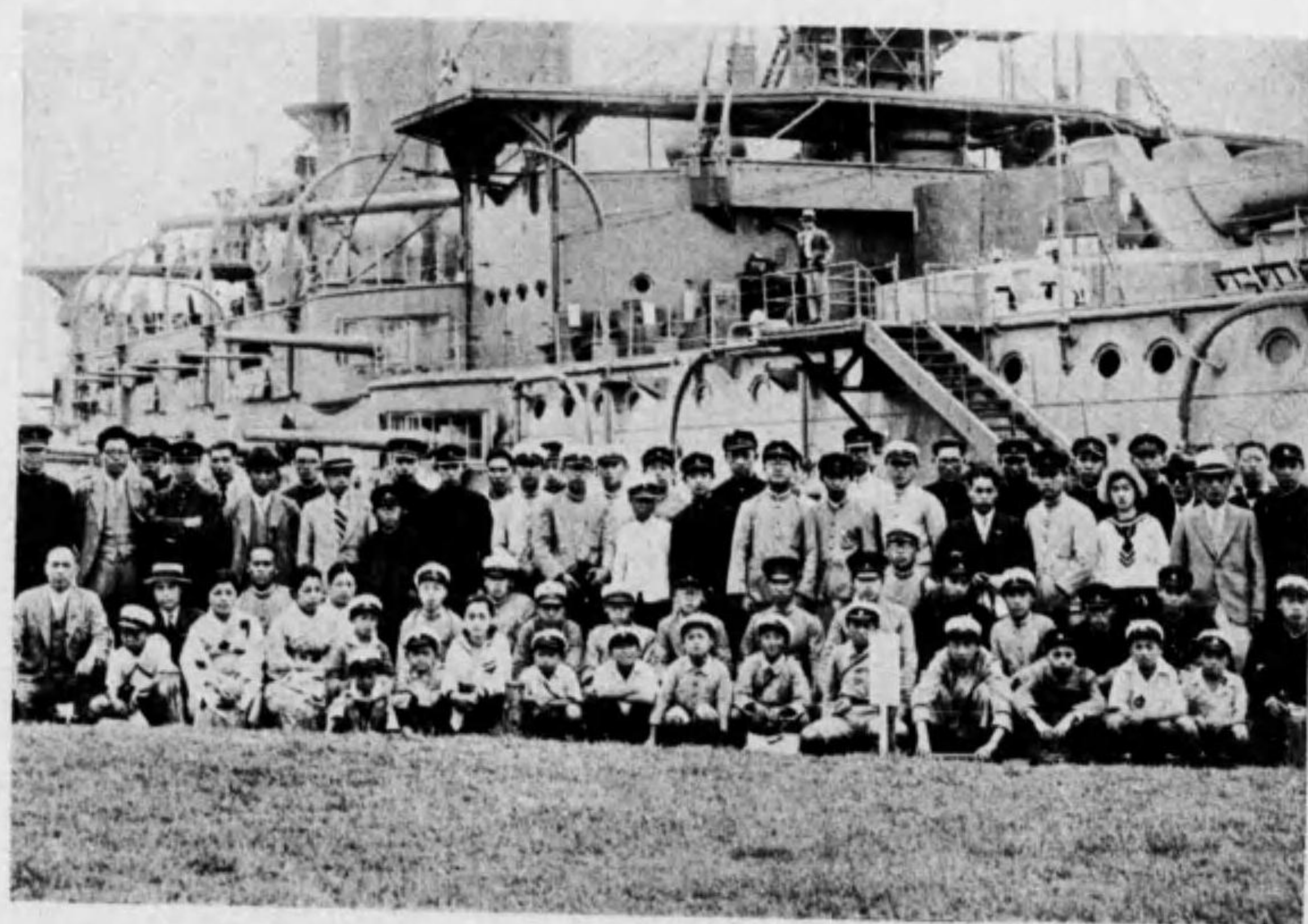
(屋坂松座銀於年二十和昭) 展畫由自空航童兒會覽展空航催主團本



(月十年十和昭) 會談座員團るせ續繼てしと事行例月



本團主催陸海軍民間航空殉職勇士靈祭
 (昭和十四年一月十日於比谷公會堂)



横須賀軍港見學團員一行 (昭和十一年六月於紀念館三笠)

大日本飛行少年團創立趣旨書

航空機が現代國家存立上に缺くべからざるものであることは最早何人も否定し得ないであらう。實に航空機は國家進展の翼である。今を去る四十數年前の西曆一八九一年、獨逸人オットー・リリエンタールによつてグライダーの發明が完成され、次いで一九〇三年米人ライト兄弟によつて飛行機が發明されるに至つて人類從來の平面的活動は更に空中に向つて立體的飛躍をなすに至り、而して戰時に於ける作戦は元より平時に於ける交通貿易の様相も全く一變せざるを得なくなつたのである。

即ち歐洲大戰當時の如き飛行機の搖籃時代に於てすら既に軍用機の活動は從來の戦法を根本的に覆して、以てその重要性を遺憾なく發揮したのである。一方、歐洲大戰後に於ける各國航空の發展振りを見るに、空の旅は勿論、貨物、郵便等の空中輸送は晝夜を問はず行はれ、その航空路は急速の伸張をなしつゝあり、特に英米佛等の航空路は自國內の充實は夙くからこれをほゞ完成して、更に本國を發して我等の亞細亞に迫りつゝあるのであつて、これは恰かも我が日本の膝下を見すかして侵入しつゝある状態に外ならない。

然るに、斯の如き世界航空界の狀況に對して我が日本の現状は果して如何なる程度のものであらうか

飛行機の數に於ても飛行機を活用する人の數に於ても、又飛行場、飛行機製作工場に於てもすべて貧弱の一言に盡くるの狀態である。更に一般國民の航空思想に念ひを致すときはその低劣なる誠に寒心に堪へないものがあるのである。

従つて我が皇國日本の空を守る陸海空軍の所謂第二線を以て任すべき民間航空は遺憾ながら極めて貧弱であるといはねばならぬ。

特に飛行機は軍艦對商船の場合と異なり、平時民間に於て旅客又は貨物等の輸送に従事しつゝある民間機も一旦有事の秋に際會すれば直に變じて爆撃機となり偵察機となることを思へば、我が民間航空の貧弱さは單にそれのみに止まる問題として看過すべき問題では斷じて有り得ない。現在我が日本の幹線定期航空路は、僅かに東京を基點として本州、朝鮮を縦貫して滿洲に連絡するもの以外未だ見るべきもの絶無に等しいのである。これ以て我々は、三千年來輝く我が皇天土をして安全に護り而して之を子孫に傳ふることが出来るであらうか。

而して斯くの如く我が日本の航空をして今日まで貧弱不振のまゝに放置し來つた原因は幾多あるとは云へ、主なるものは實に國民の航空に對する關心の薄弱なりしに依るものと云はざるを得ない。乃ち今にしてこれに目覺めこれに對處せざれば永久に悔を遺すとも及ばず、従つて近き將來我が日本を双肩に擔ふて起つべき青少年に對する航空思想の普及、航空技能の教育こそは誠に我が日本の急務中の急務と

して勿論に附すべからざるを痛感して止まざる次第である。

我等が茲に大日本飛行少年團を創立して全國青少年に對し航空思想普及の徹底を期し、以て航空報國に邁進せんとする趣旨も亦實に茲に存するのであつて、蓋し、今日青少年が充分に航空思想を涵養して將來の航空發展に備へることは大航空日本建設上に極めて重大なる基礎たりと信するものである。

昭和七年五月

創立發起人一同

大日本飛行少年團々則

- 第一條 本團ハ大日本飛行少年團ト稱ス
- 第二條 本團ハ本部ヲ東京ニ置キ支部ヲ全国各地ニ置ク
- 第三條 本團ノ目的ハ皇國空軍充實ノ急務ヲ高唱シ第二國民タル全國青少年ヲ動員シテ航空愛國ノ精神ヲ養ヒ進ンデ航空發展ニ奉仕スルニアリ
- 第四條 前條ノ目的ヲ達スル爲メ行フ事業ノ概目左ノ如シ
- 一、航空ニ關スル座談會、講演映畫會、見學會、航空展覽會ノ開催、團員ニ對スル航空教育、文書出版、其他航空思想普及事業
 - 二、機關誌ノ配布（月刊）正團員以上ニ對シ毎月配布
 - 三、飛行訓練並ニ同乗飛行及ビグライダーニ依ル初步滑空訓練（規則ハ別ニ定ム）
 - 四、愛國號、報國號軍用機ノ献納資金ヲ得ル諸事業
 - 五、現役軍人及ビ飛行遭難遺家族慰問
 - 六、少年航空兵又ハ飛行士志願者ノ指導獎勵

七、青少年愛國運動者ノ表彰

第五條 團員ヲ別ツテ左ノ八種トス

一、學校團員

本團ノ趣旨ニ賛成シ三十名以上ノ希望者ヲ以テ組織スル小學校尋常科四年生以上同高等科二年生マデノ男子ニシテ團費年額一人五十錢ヲ納入スル者、但シ入團ノ際團員章代（十五錢）ハ要セズ、機關誌飛行少年ハ分隊三十名ニ二部宛トシ別ニ分隊報ヲ發行スルコトアルベシ

二、分隊團員（校外分隊）

本團ノ趣旨ニ賛成シ三十名以上ノ希望者ニ依リ一學區ヲ單位トシテ組織セル十歳以上十八歳マデノ男子ニシテ團費年額一人一圓五十錢宛ヲ納入スル者、但シ入團ノ際團員章代（十五錢）ハ要セズ、機關誌飛行少年ヲ配布ス（分隊規則ハ別ニ定ム）

三、正 團 員

本團ノ趣旨ニ賛成セル十歳以上十八歳マデノ男子ニシテ團費年額一圓八十錢ヲ納入スル者、但シ入團ニ際シ團員章代ハ要セズ、機關誌飛行少年ヲ配布ス

四、贊助團員

本團ノ趣旨ニ賛成シ團費一回限リ拾圓以上ノ釀出者

團 則

五、特別團員

本團ノ趣旨ニ賛成シ團費年額拾圓ヲ齎出スル者（但シ特別團員十年ニ及ブトキハ有功團員ニ推
舉ス）

六、有功團員

本團ノ趣旨ニ賛成シ團費一回限リ百圓以上ノ齎出者

七、特別有功團員

本團ノ趣旨ニ賛成シ團費一回限リ一千圓以上ノ齎出者

八、名譽團員

本團ノ趣旨ニ賛成シ團費一回限リ一萬圓以上ノ齎出者

名譽團員ハ終身團員ニ推薦シ團員指導ニ關シ特ニ參劃ヲ依頼ス

第六條

本團ノ維持發展ハ團費寄附金及ビ事業ニ依ル收入ヲ以テス

第七條

本團ニ左ノ役員ヲ置ク

一、團 長 一名

二、副團長 一名乃至二名

三、理事長 一名

四、理 事 三名以上

五、顧問 若干名

六、支部長 各支部毎ニ一名宛（地方本部ハ本部長）

第八條 團長副團長ハ特ニ名譽職トシテ團務ノ大綱ニ關スル指導ニ任ジ直接業務ノ遂行ニ關シテハ理事
長ヲ首班トスル理事團之ニ膺ルモノトス

第九條 會計決算ハ毎年一回之ヲ行ヒ機關誌「飛行少年」ニ廣告ス

第十條 團員章ヲ制定ス

第十一條 團服ヲ制定ス

（註）右團則ハ創立當初制定セル團則ヲ以後必要ニ應ジテ改定シタル數條アリ、即チ最近ノ團則ナルコトヲ書添
フ

團員宣誓五章

- 一、廣大無邊の君恩に報います
- 一、父母に孝養を盡し、師の教を守つて學業に精勵します
- 一、一致協力して全少年の模範となります
- 一、航空日本の建設に努め奮つて空の勇士になります
- 一、本團の詔を守り命令に遵ひます

團歌 輝く飛行少年

- 一、染める日の丸、紅もえて
光る銀翼、青雲かける
聽けや、高鳴る男の子の血潮
皇御國の、翼とならん
- 二、咲けよ蕾の山櫻花
飛べよ、若人希望の空へ
擔ふ祖國の使命は重し
皇御國の、翼とならん
- 三、大和島根の榮譽をのせて
翔れ、荒鷲、嵐も何ぞ
護れ 伸び行く日本の空を
皇御國の、翼とならん
- 四、仰げ、彩雲、日本は夜明け
東洋平和の朝日はのぼる
進め、堂々、世界の空へ
皇御國の、翼とならん

團歌並グライダー部歌

グライダー部歌

- 一、富岳の英姿、西に見て
こゝ江戸川の一角に
大日本の、若鷲と
氣負ひて立てり、健男兒
フレ― フレ― フレ―
我が部 グライダー
- 二、熱血たぎる、操縦桿
雄飛の翼、颯爽と
見よや果なき大空へ
ゆくぞ堂々、健男兒
フレ― フレ― フレ―
我が部 グライダー
- 三、國防文化、兩翼に
擔ふ我等の、この使命
果すは明日ぞ、いざ飛ばん
果すは明日ぞ、いざ征かん
フレ― フレ― フレ―
我が部 グライダー

大日本飛行少年團沿革並に事業概要

大日本飛行少年團は昭和七年五月創立準備に着手し、團則、各種機構の整備に約半歳を要し、同年十一月三日明治節を卜し前記の趣旨に則りて創立せるものにして、爾後昭和八、九兩年は云はゞ團勢整備時代とも云ふべく、昭和十年全國に支部を設置するに及び、特に同年九月七日報國第八十四號第一兒童號を海軍に献納せし時を一轉期として團勢は頓に擧り、同年及び昭和十一、十二年は云はゞ躍進時代にして、昭和十一年十一月二十三日大日本航空婦人會を本團の手により創立し、之を育成しつゝ共に協力していよゝゝ使命の達成に邁進し、更に昭和十三年本團より少年少女航空親善使節團を友邦滿洲國に派遣するの壯舉を執行するに及びて國際的に知らるゝところとなり、昭和十四、十五年度は所謂實行期なりしとも見るを得べし。

沿革及び事業概要中各種の行事、展覽會及び催物に對しては長くも各宮家より御貴重品の御貸下を賜はるの光榮に浴したる外陸海軍省、陸海軍航空本部、文部省、厚生省、航空局、海軍省海軍軍事普及部、東京府市、東京市教育局、事業實施地陸海軍及び府縣市當局、大日本飛行協會、日本航空輸送株式會社、各新聞社等より後援を賜はり、特にライオン齒磨本舗よりは終始特別の後援又は協賛を忝うせり。

本團實施事業中、特に主要と認めたるものは別に項を設けて記述し、本事業概要中には之を省略せり。又グライダー部、飛行部の毎日曜日祭日の訓練、毎月定期に實施せる團員座談會、研究會、機關誌發行等繼續的なりしものは多くは初回のみを記述せるに止め爾後のものは之を省略せり。

本團主催の諸儀式、講演會、展覽會、グライダー訓練大會、模型飛行機競技會、團員座談會等には常に陸軍、海軍を始め關係當局より夫々指導、講演官その他を派遣せられたるもその芳名は記述を省略せり。又特に必要と認めたるもの外は人事往來に關する件は之を省略して單に事業の概要をのみ記述するに止めたり。

昭和七年五月創立準備に着手す。

昭和七年十一月三日創立、海軍中將安東昌喬氏を團長に推戴し同日結成式を舉行す。事務所を東京市中

野區富士見町六十番地に置く。

創立と同時に全國小學校兒童に對する航空思想普及、同じく制空鉛筆頒布による益金を以てする軍用機献納の事業を創始す。

團員の精神として團員宣誓五章を制定す。

本團事業の直接遂行機關たる理事會の編成を定め理事長に野溝光、理事に青木峯藏、田中万作、櫻澤仁一、山崎米太郎、石川末松の諸氏就任し、常務顧問として岡千賀松、今泉周逸、栗原勇、赤柴千杖の諸氏を委嘱し、更に相談役、顧問を夫々若干名宛委嘱す。

昭和八年一月第二年目を迎へいよゝゝ所期事業を擴張す。

近き將來我が帝國を双肩に擔ふて起つべき青少年に對する航空思想普及の徹底は航空日本建設上最も緊要事たるを痛感し、その第一手段として模型飛行機の製作並に競技會を奨勵す。

小學校兒童に對する軍用機献納による愛國心の涵養と航空思想普及の目的を以て本團制定にかゝる制空鉛筆を全國小學校、中學校等に廉價にて頒布し、その益金全部を献納資金に充つることとして活動す。

資源愛護の精神涵養と併せて献納運動促進の目的を以て煙草の銀紙、齒磨の空チューブ蒐集の事業を起す。本事業に對しては内閣資源局並にライオン齒磨本舗の多大の盡力を忝うせり。

右の各事業に全力を傾注すると同時に團員擴張にも大いに努め、本部、各地方支部の所屬團員は續々増加せり。

本年度は概ね以上の通り各事業及び團員獲得に全力を注ぎほゞ所期する成果を收めたり。

昭和九年 昨年度實施の各事業を引續き實施し着々成果を收む。特に軍用機献納事業中、煙草の銀紙、齒磨空チューブの蒐集事業に對してはライオン齒磨本舗より特別に全市小學校に献納箱を寄贈され、之により蒐集量に於てもいよゝ好調を示し來れり。

尙特記すべきは本事業に對し海軍各艦船部隊に於ても賛同の意を表せられ本部に送付せらるゝもの多額に上りたり。

三月十日前團長後任として海軍大佐東條政二氏、副團長に小島錦一郎氏をそれぞれ就任す。

九月東京市教育局に於ては本團の報國兒童號献納に賛意を表せられ、同時に東京市のみにも一機献納

したしとの希望を表明せられたるに就き、之に基く献納事業の確立を考慮す。次で大阪、名古屋、神戸、京都、横濱の五大都市を初め各都市にこの運動を擴張す。

團員數も次第に増加し之が指導に關する綱領を定む。特に地方團員をも併せ指導する方法として本團機關誌を發行することに決定す。

十一月本部を東京市麴町區九段四丁目八番地に移轉す。

十二月二十八日本團機關紙制空を創刊す。

昭和十年 本年度に入り從來實施來りたる海軍報國號献納事業を始め航空思想普及諸事業に對しいよいよ積極的努力を傾注す。

一月十五日京都支部長に海軍少將横地錠二氏を、横須賀支部長に海軍大佐藤井雅氏を、名古屋支部長に幸田銈太郎氏を、静岡支部長に稻森誠二氏を、神戸支部長に海軍少將井手元治氏をそれぞれ委嘱す。

二月十一日建國祭に参加す。同日大阪市に大阪支部を設置す。

二月十二日東京日日新聞社社會事業團後援の下に紀元の佳節を卜し全國保護兒童に制空鉛筆を贈與す。一月乃至二月兩月間東條團長、小島副團長、野溝理事長は各支部に分擔出張團勢並に諸事業の振興を期す。

陸海軍少年航空兵志願の獎勵運動を起す。

三月十二日現在海軍報國號献納資金は制空鉛筆の賣上益金、銀紙、空チューブの蒐集等によつて得たる金額を合し一萬九千七百三十四圓七十八錢に達す。

本年一月より三月に至る間實施したる團員座談會は毎月第二日曜日本部に於て、見學會は一月航空神社
二月東京飛行場、三月霞ヶ浦海軍航空隊を選び行ひたり。

三月一日兵庫縣加古川町に支部を設置し、支部長に鈴木彌三郎氏を委嘱す。山口縣柳井町に支部を設置し支部長に小島貞次郎氏を委嘱す。

三月三十日國民新聞社講堂に於て航空思想普及子供會、及び航空講演並に映畫會を開催す。

五月二十七日海軍記念日に當り東京市各所に於て記念講演會を開催す。
五月二十九日より六月七日まで上野松坂屋に於て日露戰役三十周年記念兒童航空思想普及作品展覽會を開催す。後援東京市教育局、日本空中輸送株式會社。

六月十一日右展覽會に出品入賞せる兒童に對する賞品授與式を帝國飛行協會屋上航空神社々前に於て舉行す。

六月十六日右入賞兒童中より更に六名の優秀者を選び特賞として東京飛行場に於て飛行機に同乗せしむ
七月二十日より八月三十一日まで東京、横濱方面團員のために、横濱市外金澤の景勝の地に臨海學園を設置し、夏季訓練を實施す。

八月三日帝國飛行協會屋上の航空神社に參拜す。尙この參拜は今後在京團員の月例行事となす。

九月七日報國第八十四號第一兒童號を海軍に献納す。本日その命名式を東京飛行場に於て嚴肅且盛大に舉行せらる。(別項同記事參照)

十月六日東京目黒競馬場を會場として日露戰役三十周年記念模型飛行機競技大會を開催す。
十二月一日東京代々木練兵場に於て本團グライダー部發會式を舉行す。

軍用機報國號第二兒童號の献納事業は航空思想普及を兼ねたる制空鉛筆の頒布その他によりいよ／＼積極的に活動す。更に團員座談會を始め團員に對する航空教育事業に於ても日に月に積極化する。

昭和十一年一月六日東京市芝區田村町一丁目三番地飛行館内に本部を移轉す。

一月十五日大日本模型飛行機聯盟を本團内に設置し、全國の模型飛行機愛好者を糾合して連絡統一を計り以て斯道の健全なる發達を促すを目的とす。

二月二十九日本部所在飛行館に於て團員座談會を開催す。本座談會には海軍航空本部より加藤尙雄中佐特に臨席せられ種々團員を誘掖せられたり。

二月十一日建國祭並に同大行進に參加す。

尙報國號第二兒童號献納運動はいよ／＼努力の甲斐あり着々成果を收めつゝあり。
五月二十日より三十一日まで飛行館展覽室に於て小學生航空自由畫手工品展覽會を開催す。東京、川崎

横濱、横須賀四市より總計二千百六十點を集む。

五月帝國飛行協會と共同にて巡回航空展覽會を東京市内各小學校を會場として開催す。

六月二十一日團員の横須賀軍港見學會を開催す。

七月十三日より千葉縣松戸町に於て航空展覽會、映畫會、講演會を開催、同月十七日より本團専用松戸滑空場（約七萬坪）の建設工事に取掛り、同町在郷軍人、青年團、學校生徒、婦人會等の勞力奉仕始まる。

八月二日松戸に於て滑空場地鎮祭並にグライダー部練習始式を舉行す。（以下グライダー部記事はグライダー部沿革を参照のこと）

十月四日本團専用松戸滑空場に於て全日本模型飛行機競技大會を主催す。

十月二十一日より十一月三日まで大阪市南海高島屋に於て我等の海軍大展覽會を主催す。

十一月二十三日本團内に大日本航空婦人會を創立す。

昭和十二年一月七日日比谷公園廣場に於て第一回少年飛行機新年大會を開催す。參會の少年少女に二千機の模型飛行機を贈呈、一齊飛翔其の他の行事に日比谷原頭壯觀を極む。尙本大會は今後毎年の新年行事となす。

一月二十四日飛行館講堂に於て晝夜二回、陸海軍民間航空殉職勇士慰靈祭並遺家族慰安演藝會を開催す。

同大會に招待せる遺家族は東京、神奈川、埼玉、千葉各府縣在住の約二百名に及びたり。

一月十九日朝鮮大邱に大邱支部を設置す。

二月十一日建國祭並に同行進に参加す。

三月十日より八日間横濱市野澤屋に於て横濱海軍航空隊開隊記念航空展覽會を主催す。

三月二十五日九段市立第一中學校講堂に於て朝日新聞社神風號の亞歐大飛行に對する都下少年少女聲援大會を開催す。

四月一日より十日間東京銀座松坂屋に於て航空展覽會を主催す。

四月三日同會場に於て團員大會を開催す。

五月一日本團に飛行部を設置し、團員中の希望者を練習生として入部せしめ専ら航空機地上整備訓練を課すこととし、本日東京飛行場内日本飛行學校格納庫に於て發會式を舉行す。飛行部長に日本飛行學校長相羽有氏を委嘱す。同日飛行部練習生六十名の入部式を舉行す。

五月十二日より五月二十七日まで名古屋市松坂屋に於て輝く少年航空展覽會を主催す。

五月十八日本團機誌制空を飛行少年と改題し本日第三卷六月號を發行す。

七月一日東條團長は本日東京發大阪、岡山、廣島、吳、岐阜各支部へ出張視察の上七月九日歸着。朝日新聞社の軍用機献納事業を協賛す。

七月十八日グライダー命名式を松戸格納庫に於て舉行す。

八月八日飛行部第二期練習生五十名を採用入部せしむ。

九月九日飛行館講堂に於て上海の實戦を見る講演と映畫の會を主催す。

九月十日本部内に少年航空相談所を開設す。一般青少年に對し軍民航空入門の相談一切に應じ、又地方青少年に對しては通信により指導をなす。

九月十二日グライダー部第四期生入部式を舉行す。

九月十七日大阪支部を大阪本部に昇格せしむ。本日結成式舉行、初代大阪本部長に海軍大佐吉見勇助氏を委嘱す。本團より東條團長、野溝理事長、宮野常務顧問出張す。

九月二十八日東京新宿伊勢丹に於て空軍慰問金募集映畫會を主催す。

十月九日横濱海軍航空隊を慰問す。

十月十二日海軍省及び陸軍航空本部を通じ第一線航空部隊に慰問品を贈る。

十月十五日野溝理事長、内田グライダー部長以下六名は新潟縣小千谷町に航空思想普及の目的を以てグライダー一機を携行出張す。尙ライオン齒磨映畫班を同行、航空映畫會を同地に開催す。十八日歸着。

十月二十四日グライダー部第五期生入部式を舉行す。(於松戸)

十月三十一日大日本青年航空團第一期第二次訓練終了式に参加す。(於羽田)

十一月三日大阪本部に飛行部を設置、本日發會式を舉行す。(於堺水上飛行學校)

十一月七日松戸滑空場に於て本團秋季大運動會を開催す。松戸高等女學校の特別参加等あり盛會を極む。

十一月十八日海軍省より海軍志願兵募集映畫會を委嘱され以後東京府市(各區、郡一周の豫定を以て)

各地を巡回す。

十一月二十一日東京新宿伊勢丹に於て在京團員大會を開催す。

十二月一日小島副團長解任に就き常務顧問陸軍少佐宮野忠雄氏を副團長に委嘱す。

十二月十二日朝日新聞社その他と共同主催の下に南京陥落祝賀音樂大行進を行ひ、グライダー部、飛行部員百五十名参加す。

昭和十三年一月七日第二回少年飛行機新年大會を日比谷公園廣場に於て開催す。参加小學兒童二千名に模型飛行機を贈呈、グライダー部、飛行部員の指導により飛翔法、一齊飛翔等を実施大いに少年航空の意氣を高調す。尙團員は大會後飛行館屋上航空神社に參拜せり。

一月十六日日比谷公會堂に於て陸海軍民間航空殉職者慰靈祭並に遺家族慰安演藝大會を主催す。參會者堂に充つる大盛會裡に終了す。

一月十八日より三十一日まで津市大門百貨店に於て戦捷日本時局航空展覽會を主催す。

一月二十八日東京新宿伊勢丹に於て上海事變想ひ出の會を主催す。

二月十一日建國祭並に同大行進に参加す。同日午後一時より飛行館屋上航空神社々前に於てグライダー部第六期練習生の入部式を舉行す。

二月二十日東京市磯川尋常小學校兒童を中心として本團磯川分隊誕生す。分隊長に入澤基二氏を委嘱す。二月二十六日本團が創立せし大日本航空婦人會提唱の下に創立準備中なりし荒鷲母の會の發會式は本日澁谷の海軍館に於て舉行す。

三月十日陸軍記念日思ひ出の會を東京市白木屋に於て主催す。

四月二十九日より五月十日まで岡山市天満屋に於て戦捷日本時局航空展覽會を主催す。尙同會期中岡山市にて四回、津山市、倉敷市にて各一回航空映畫會を主催す。

四月二十九日天長の佳節、東京代々木練兵場に於て舉行せられたる觀兵式に許可されて在京團員拜觀の光榮に浴す。

五月二十日より同三十日まで廣島市福屋百貨店に於て戦捷日本時局航空展覽會を主催す。本展覽會のみならず、本團主催展覽會に於ては常に其の地方小學兒童の航空自由畫又は航空關係手工品の出陳を促し以て兒童航空思想普及の徹底を期したり。

五月二十七日本團樺太支部大泊に於て結成さる。

五月二十八日隅田川に於て行はれたる海軍記念日短艇競技大會を協賛し、又二十九日日比谷公會堂に於

て海軍記念日母の會を主催す。

六月十二日グライダー第二格納庫完成す。

六月中旬仙臺市三越に於て東北六縣兒童航空自由畫手工品展覽會を主催す。

六月十五日原田積善會よりフライマリー二機を寄贈さる。

六月十九日本團飛行部主催にて羽田東京飛行場に於て模型飛行機展覽會を開催す。

六月二十三日全團員の赤誠をあつめて謹作せる模型飛行機二基を

皇太子殿下に献上し奉る。本日東條團長は團員代表二名を同伴して宮内省に出頭、本團の活動狀況を收めたる寫眞帳と共に謹んで献上せり。尙本日大阪本部より伏見宮博義王殿下に刺繡額「水邊の虎」を献上し奉る。

六月二十六日本團岡山支部グライダー部結成さる。追てその發會式は七月三十一日舉行さる。

七月二日東京水交社に於て本團顧問招待會を開催す。臨席の顧問は山本英輔海軍大將、川島義之陸軍大將を始め約二百餘氏に上り、種々激勵の辭を頂く。

七月三日支那事變一周年銃後奉公大行進に参加す。尙午後飛行館中央亭に於てグライダー部第七期練習生及び飛行部第四期生入部式を舉行す。

七月七日日比谷公會堂に於て支那事變一周年記念の會を主催す。

七月中旬新潟市萬代百貨店に於て輝く航空展覽會を主催す。同縣下兒童航空自由畫展を併せ主催す。
七月二十一日飛行館講堂に於て本團幼年部發會式を舉行す。

八月七日東京代々木練兵場に於て航空日本國威宣揚模型飛行機東京大會を主催す。

八月十四日東京九段軍人會館に於て上海戰線思ひ出の夕を主催す。

九月十日飛行館地階中央亭に於て東京在住團員大會を開催す。

九月十八日海軍館に於て南郷少佐を偲ぶ會を主催す。又當日代々木練兵場に於て本年度第二回模型飛行機大會を開催す。

九月二十六日本團より派遣の少女遺滿航空親善使節團本日午後九時東條團長引率の下に東京驛發列車にて出發す。(別項同記事參照)

九月二十七日日比谷公會堂に於て開催されたるヒットラー・ユーゲントとの交驩大會に参加す。

十月十五日より同二十九日まで大阪市南海高島屋に於て輝く海軍大展覽會を主催す。

十月下旬金澤市大丸百貨店に於て輝く時局航空展覽會を主催す。

十月二十三日埼玉縣所澤小學校に於て本團所澤分隊結成式を舉行す。分隊長に坪川敬之助氏を委囑す。

十月三十日漢口陥落記念銃後奉公大行進に参加す。

十一月三日グライダー部第八期生入部式を松戸に於て舉行す。

十一月六日本年度第三回模型飛行機競技大會を主催す。

十二月十日より二十日まで東京日本橋高島屋に於て軍艦旗制定五十周年記念兒童作品自由畫展覽會を主催す。

昭和十四年一月七日日比谷公園廣場に於て第三回少年飛行機新年大會を主催す。

一月四日より同十五日まで東京新宿三越に於て航空日本飛行機模型展覽會を主催す。本展覽會は純模型飛行機展にして各種スケール、フライング模型數百種を陳列し全市模型ファンを啓發するところ多くなるものあり、又會期中會場に製作實習室を設け製作方法を指導せり。

一月十五日日比谷公會堂に於て陸海軍民間航空殉職勇士慰靈祭並に遺家族慰安演藝會を主催す。本年を以て第四回を數へ、招待遺家族二百二十六名、一般入場者數二千六百九十九名、招待者二百二十五名
總計三千五百五十名に及べり。

二月七日前年十二月主催せる軍艦旗制定五十周年に出品の兒童作品三千點を海軍省恤兵部へ海軍將兵慰問品として献納す。

二月十一日建國祭並同大行進にグライダー部、飛行部各練習生及小石川礫川分隊員計百五十名參加す。

三月八日本團大阪本部長吉見勇助氏の委囑を解き三井清三郎海軍少將を新に委囑す。

三月二十六日團員一百名は東條團長引率の下に霞ヶ浦海軍航空隊見學に赴き、一泊、翌二十七日幾多の

體驗を得て無事歸着す。

四月一日東京市第二日暮里尋常小學校に於て航空映畫の會を主催す。

四月十一日本團本部を東京市麴町區九段二丁目三番地（靖國神社前）に移轉す。

四月二十七日より五月六日まで佐世保市に於て、五月一日より同十四日まで鹿児島市山形百貨店に於てそれ〴〵航空展覽會を主催す。兒童航空自由畫展を併せ行ふこと從來に同じ。

四月中旬東京新宿伊勢丹に於て伸びよ小國民輝く航空展覽會を主催す。更に同所に於て五月二十日より六月四日まで讚へよ荒鷺展覽會を主催す。

本展覽會は畏くも久邇宮若宮殿下、李王若宮、李鍵公妃、同若宮各殿下御台臨の光榮に浴す。

五月二十七日海軍記念日をトし、東京日本橋白木屋に於て海軍記念日思ひ出の會を、日比谷公會堂に於て海軍軍樂隊大演奏會を、翌二十八日日比谷公會堂に於て海軍記念日婦人子供大會を、更に翌二十九日日比谷公會堂に於て海軍記念日母の會をそれ〴〵主催し、この前後本團は舉げて海軍記念日週間の如き活動をなす。

五月三十一日海軍省より本團大阪本部に對し一三式水上練習機一機を無償下附せらる。

七月六日日比谷公會堂に於て支那事變二周年を記念して皇軍に感謝の會を主催す。

七月八日より三日間本團にて都下小學校手工科教員（主として各區擔任校長）に對する模型飛行機製作

講習會を開催す。講師帝大航空研究所山崎好雄氏外數氏を委嘱せり。尙本講習會を第一次としこれに参加せる教員は同月十三日より更に各區に於て區内手工科教員を集め、これに本團より委嘱せる指導者を加へそれ〴〵第一次講習教案に依り第二次講習會を開催す。これにより東京市内小學校教員に對する模型飛行機製作法並にそれを通じてなされたる航空思想普及の成果は極めて大なるものあり、本講習會を劃期として全國に兒童航空教育の機運勃然として起る。

七月二十三日本團松戸滑空場に於て滑空訓練並に競技大會を主催す。（グライダー部沿革參照）

九月十九日海軍より本團に對し教育用として一三式艦上攻撃機二機並に附屬品一式を無償下附さる。

九月二十日本團主催の下に東京市全小學校手工科教員の霞ヶ浦海軍航空隊見學會を實施す。

十月一日東京九段軍人會館に於て少年航空の夕を主催す。尙本大會はグライダー部訓練資材充實の資金に充つる目的を以て開催したるものなり。（グライダー部沿革參照）

十一月二十三日北海道支部結成式を旭川市商工獎勵館に於て舉行す。同支部長に越川喜久馬氏を委嘱す。東條團長出張す。

十二月十日本團向島分隊結成され、分隊長に近藤小一氏を委嘱す。

昭和十五年一月六日日比谷公園廣場に於て紀元二千六百年祝賀少年飛行機新年大會を主催す。尙本年は在京全團員これに参加して東條團長の視閲を受く。

一月十四日午前中本團に於て陸海軍民間航空殉職勇士慰靈祭を、午後一時及び五時よりの晝夜二回日比谷公會堂に於て航空遺家族を招待して空の勇士を讃へる演藝會を主催す。

一月二十日小石川傳通會館に於て礫川分隊創立二周年記念式及び海洋と航空講演會を開催す。

一月二十七日東京新宿伊勢丹に於て上海事變記念婦人と子供の會を主催す。

一月二十八日日本橋三越に於て上海事變記念音楽と舞踊の會を主催す。

二月十一日建國祭並に同大行進に参加す。グライダー部第九期練習生を採用す。

三月二十三日より二週間二級滑空士受験合宿訓練を松戸に於て開始す。(グライダー部沿革参照)

三月二十六日葛飾區龜青小學校に於て本團龜有分隊結成式を舉行引つゞきその祝賀映畫會を開催す。分隊長に本宮甲子三氏を委嘱す。

四月十九日松戸滑空場第三格納庫建設の議決し本日地鎮祭を舉ぐ。

四月二十日日本團活動狀況を収めたる映畫輝く飛行少年の撮影を開始す。

五月十四日日比谷公會堂に於て白衣の天使を讃ふる會を開催す。

五月十七日所澤小學校、所澤歌舞伎座に於て所澤分隊創立一周年記念式並に航空映畫會を開催す。

五月十八日東京新宿伊勢丹に於て航空講演と演藝映畫の會を主催す。

五月二十二日東條團長は中支派遣陸海軍慰問の目的を以て輝く部隊を引率本日東京を出發す。

五月二十五日東京新宿伊勢丹に於て輝く海と空子供大會を主催す。越えて二十六日同所及び日本橋三越に於て帝國海軍を讃ふる會を主催す。

五月二十七日日比谷公會堂に於て海軍記念日婦人子供大會を主催す。

五月二十八日隅田川に於て舉行せられたる海軍記念日短艇競技大會を協賛、且つ團員多數これに参加奉仕す。尙本日横濱市野澤屋に於て帝國海軍を讃ふる會を主催す。

六月二十七日九段軍人會館に於てノモンハン百機墜を記念して空の勇士に感謝の夕を主催す。

六月三十日代々木練兵場に於て本年度第二回模型飛行機競技大會を主催す。

七月六日小石川區傳通會館に於て航空映畫と音楽の夕を主催す。尙本日豫て製作中なりし本團映畫輝く飛行少年完成せしに就きその試寫會を併せ行ふ。

七月七日小石川區柳町尋常小學校に於て、同校兒童を中心として結成されたる本團やなぎ分隊の發會式を舉行す。同夜同所に於て航空映畫の會を開催す。やなぎ分隊長に大島覺之助氏を委嘱す。

七月二十一日日比谷公會堂に於て輝く飛行少年の夕を主催す。

七月二十五日より八月十八日まで大阪府中河内郡盾津村大阪陸軍飛行場に於て本團夏季合宿滑空訓練を実施す。その前日二十四日内田グライダー部長は東京よりの參加者十四名を引率西下す。

七月二十七日東寶劇場に於て渡洋爆撃三周年記念荒鷺遺族更生慰安大會を主催す。

七月二十九日横濱市上大岡青年館に於て横濱上大岡分隊結成式並に結成祝賀航空映畫會を開催す。
八月三日、四日國威宣揚富士登山訓練大會を実施す。本訓練大會には本團職員及び在京團員中より成績優秀者を選抜し、これ等一行は理事長これを引率、特に製作したる大模型グライダー三機その他を携行、四日富士山頂よりこれを放翔すると共に航空日本躍進の祈願をなしたり。
八月二十二日、三日東京、横濱地方在住團員の夏期訓練を横濱市外金澤の海濱に於て実施す。尙二十三日一行は横須賀軍港施設を見學したる後鎮守府に及川司令長官を訪問訓示を受く。
九月十四日芝區櫻田尋常小學校に於て海と空の會を開催す。
九月十五日松戸に於てグライダー部第十期練習生並に飛行部第六期練習生の入部式を舉行す。
九月二十八日航空日制定記念市内大行進並に航空感謝祭に本團分隊員並に男女グライダー部、飛行部員約五百名參加す。本日を期し全國の航空遺跡の顯彰を行ふ。また所澤支部と共催にて徳田、木村兩中尉外五勇士の表忠碑前にて慰靈祭を執行す。
航空日制定記念「少年少女の會」を二十八、二十九の兩日日本橋三越及び新宿伊勢丹に於て主催せる外、陸海軍、航空局その他關係當局の指示に従ひ積極的奉仕をなしたり。
十月十三日東條團長は團員二十五名を引率し慰問品及び映畫を携へて東京陸軍航空學校を慰問す。
十一月三日本團創立九周年を記念し、九段軍人會館に於て紀元二千六百年、日獨伊同盟記念團員大會を

主催す。

十一月十九日より三日間東京市主催興亞青少年大會に参加す。
十一月二十三日東京代々木練兵場に於て第三回東京市學童模型飛行機競技大會を主催す。尙本日本團函館支部結成式を同市函館新聞社に於て舉行す。支部長に原忠雄氏を委嘱す。
十二月二十一日より冬季合宿滑空訓練を松戸及び市川市國府臺東練兵場に於て実施す。
昭和十六年一月三日より同九日まで函館滑空協會の委嘱を受け松戸に於て同協會冬季合宿滑空訓練を指導す。
一月六日日比谷公園廣場に於て第五回少年飛行機新年大會を主催す。
一月十二日日比谷公會堂に於て航空殉職勇士遺家族招待空の勇士を讃へる會を主催す。
一月二十六日日比谷公會堂に於て航空映畫と演藝の會を主催し戦傷病將士並に本團關係者を招待す。
一月三十日民間航空一元化の國策に順應して近く大日本飛行協會に本團機關を舉げて寄贈するに決し本日よりその整理事務を開始す。
三月二十三日九段軍人會館に於て解團に就き團員に感謝の會を主催す。
三月二十八日東京水交社に於て解團に就き關係功勞者を招待感謝の會を開催す。

報國第八十四號(第一兒童號)献納

昭和七年十一月本團創立當初より開始せる事業中、先づ特記すべきは軍用機献納事業である。即ち創立と同時に本團に於ては全國兒童の赤誠を動員してその第一回計畫として海軍に對する報國號軍用機献納事業に着手したのである。而して第一兒童號の献納資金は本團發賣にかゝる制空鉛筆の益金、廢物銀紙及び齒磨空チューブ等を蒐集して得たる代金等實に零細なる金額の累積にして、これぞ報國の赤誠中の赤誠と云ふべく、これが不斷の努力は事業開始三年を充たすして美事なる實を結び、昭和十年九月七日遂に海軍九〇式艦上戦闘機一機を完成して、その命名式は羽田東京飛行場に於て嚴肅且つ盛大に舉行せられたのである。

當日海軍、文部、商工、逓信各大臣、海軍航空本部長、横須賀鎮守府司令長官、帝國飛行協會長等の臨席並に關係各方面の官民五萬餘參列の下に命名式の盛典は午前十時より舉行せられた。

先づ本團小島副團長の經過報告及び海軍側の報告あり次で神官の修祓、降神、献饌、齊主の祝詞があつた後献納者として本團東條團長、洋服商組合會頭(本日東日本洋服號も合せ命名式行はる)の各献納の辭、之に應へる海軍大臣の謝辭、續いて命名に移り海軍大臣は今日の献納機二機に面し嚴肅に「報國第八十四號を第一兒童號、報國第八十二號を東日本洋服號」と命名、それより文部、逓信、商工各大臣

横須賀鎮守府司令長官、帝國飛行協會長の各祝辭朗讀、及び祝電披露あつて後、玉串奉奠、神符奉安、撤饌、昇神の儀あり、更につゞいて全國兒童代表として東京市東郷小學校三年生前田昭二君及び静岡縣師範學校附屬小學校三年生辻陽子さんの壯途を送るの辭、並に花束贈呈あり、最後に國家奏樂、本團顧問山屋海軍大將の發聲によつて萬歳を三唱して意義深き盛儀は一先づ閉ざされたのであるが、式後横須賀より飛來せる戦闘機三機と共に献納二機が式場上空に展開する高等飛行の妙技の數々は、報國の赤誠に燃ゆる參列五萬の官民をしていよゝ感奮せしむるものがあつた。況んや直接この献納運動を計畫し努力し來つて今日此の日を迎へ、この空を仰いだ本團關係者は等しく永久に忘れられざる感激を覺えて、更に第二兒童號献納へと報國の志をいよゝ固うしたのであつた。

經過報告

世界大戰は地球上各方面に顯著なる變動を與へましたが、わけても航空界に隔世的躍進を及ぼした事に關係のあつたことは何人も異議をはさむものはないと信じます。

我が國は幸か不幸か戦時の中心より遠隔の爲めに其の刺戟尠くして國民同胞の關心の比較的薄いのは止むを得ずとは言ひながら、甚だ遺憾に存するものがあります。

大日本飛行少年團は三年前より此の思想普及に念願を置いて立ちました。其の手初めとして我國少年よりしての報國號献納を企て、各方面に謀りました處幸に熱烈なる御賛同を得ましたのは非常に幸慶に存するものであります。

先づ全國學校数は約一萬二千、在郷軍人分會數六百、其他地方的に個人、公私人として最も純情なる御共鳴に與る後援者中の代表的のもの二三を申し上げれば、海軍各官衙艦船勤務の向々は申す迄もなく、地方的には平塚火藥廠を中心としたる平塚市、新聞社にありては静岡民友新聞社、北海タイムス社、個人としては徳川公爵家、末次大將閣下、小林富次郎殿、特に其の商店に於ては東京大阪の本支店員を擧げて以上の私共の運動に或は便宜を與へられ、或は物質的の支援を給はりました累積が今日の結成を見得るに至つたのであります。

本日海軍當局の御手厚き御執なしにより、此盛儀を擧げられました事は私共一同の感銘致すものであります。

簡單ながら以上御報告申し上げます。

昭和十年九月七日

大日本飛行少年團副團長

海軍機關大佐 小 島 錦 一 郎

献納之辭

皇國日本の非常時局に當りまして全國小學校兒童並に中等學校生徒に航空思想普及徹底を目的とせる我が大日本飛行少年團は、空軍充實に對する奉仕事業として普く全國兒童より『制空』鉛筆純益金と廢物煙草銀紙及煉齒磨空チューブ蒐集による零細なる資金を以て海軍機献納を申出でました處海軍當局に於かれましては純真なる兒童の微衷を容れられ此の新鋭誇るべき艦上戦闘機一機を建造せられ帝國國防の第一線に加へらるゝに到りました事は全國兒童の光榮且つ欣幸とする所であります。本日茲に海軍大臣閣下御臨場の下に本機將來の武勳を祝福する壯嚴なる命名式を舉行せられ關係者一同此の光輝ある式典に參列するを得ました事は誠に感激に堪へざる次第であります。幸に本機が海軍の活躍に資し國防の重任を完ふする事を得ますならば全國兒童の喜び之に過ぐるものはありません。之を以て献納の辭と致します。

昭和十年九月七日

大日本飛行少年團團長

海軍大佐 東 條 政 二

海軍大臣謝辭

今回東日本洋服商組合聯合會々員諸氏並に大日本飛行少年團關係學童其の他有志者各位の篤志を以て海軍々用飛行機建造資金を御献納に相成りましたことは洵に感謝に堪へざる所でありまして茲に厚く御禮申上ます。

海軍は喜んで御芳志を受納し御覽の如き戦闘機を製造致しました。今後之等の飛行機に搭乘致しまする者は勿論、其の他全海軍將士一同は永く献納者各位の赤誠を胸底に銘記致しまして、國防の重責を遺憾なく遂行することに全幅の努力を致しますることを確信致します。

茲に重ねて深く御禮を申上ぐると共に關係各位へ宜敷御傳へあらんことを御願ひ致します。

昭和十年九月七日

海軍大臣 大角 岑 生

文部大臣祝辭

本日爰に報國第八十二號並に同第八十四號飛行機命名式を擧げらるゝに方り深甚の祝意を表し一言所懐を述べますことは私の光榮とするところであります。現下國際情勢の逼迫に鑑み世界各國競つて國防の充實を企畫し就中飛行機其の他新兵器の整備改善に力を致しつつある際新銳の戦闘機を我國海軍の第一線に加へましたことは大いに意を強うするものがあります。特に第一兒童號が大日本飛行少年團關係學童其の他有志の零碎なる献金に依て製作せられましたことは洵に感銘に堪へないところであります。我國航空線の擁護と之が開發の上に甚大なる意義を加へたること、信するのであります。私は茲に本日の吉辰を卜し颯爽として處女航空の壯途に上る兩機の前途を衷心より祝福し搭乘戦士の武運長久を祈ると共に、陸續として軍用機製作費を献納せらるゝ至誠報國の篤志に對し萬腔の謝意を表する次第であります。

昭和十年九月七日

文部大臣 松 田 源 治

遞信大臣祝辭

現下の我國内外の情勢は頗る多事多難でありまして内國家民心の安定を圖ると共に外皇威を益々發揚

するの方策を講ずることは皇國の發展の爲誠に緊要なることであります。就中國防の充實は極めて切實なる問題でありまして之が爲には官民協力一致して目的の達成に邁進するの必要を痛感致すのであります。東日本洋服商工組合聯合會員諸氏竝に大日本飛行少年團關係學童其の他の有志各位は能く今日の事態を直觀せられ、時局に處する報國の精神發露の一端として此度海軍に新銳の飛行機を献納せられ、本日茲に報國第八十二號竝に第八十四號飛行機として命名式を舉行せらるゝに至りましたことは邦家の爲洵に慶賀に堪へませぬ。私は諸氏の此度の企に對し深く敬意を表しますると共に諸氏に於かれては今後益々報國至誠の純情を發揮して國家社會の爲御盡瘁あらんことを切望する次第であります。終りに臨み本機將來の武勳を祈り一言以て祝辭と致します。

昭和十年九月七日

遞信大臣 床次竹二郎

壯途を送るの辭

あゝうれしい、今日は何とうれしい日なんだらう。きつと日本中の子供がみんなニコ／＼して居るとだらう。今日は僕等の飛行機が生れた日なんだもの。僕等が空のチューブを運動場のすみつこの大日本飛行少年團と書いたきれいな箱にボン／＼と入れてをいたのがこんな立派な飛行機になつたんだ。

海軍大臣閣下から御名前を頂いた報國第八十四號は銀色のツバサに第一兒童號の文字もあざやかに、あゝなんと勇ましいすがたぞらう。飛行場はこの報國號飛行機の誕生をお祝ひする人で一ばいだ。高く／＼上る様子を僕たちに見せてもらへると思ふとうれしくてたまらない。とても強さうなりつばな、この飛行機がプロペラの音も勇ましく航空母艦からとび立つて、自由に大空をかけまわること考へるとうれしいなあ。勇ましいなあ。僕も早くとびたくなつた、そして日本に攻めてくるにくい敵の頭の上から『ポカン』とバクダンを投げつけてやりたい。僕等の心のこもつた報國第一兒童號よ勇しくとびたつて皆お前が力一ばい御國のために戦つてくれるのを待つて居るんだよ。今日一緒に生れた報國東日本洋服號と仲よく手をとつてしつかりはたらいて下さい。

報國第一兒童號 萬歳 報國東日本洋服號 萬歳

昭和十年九月七日

東京市東郷尋常小學校三年生

前田 昭二

壯途を送るの辭

飛行機さん、飛行機さん、

報國號献納

ピンとはつた銀色のつばさ、キラ／＼光るプロペラー、
まあ、なんて元氣なすがたなんでせう、勇しい音をたて、今にも飛出しさうな姿勢で、キチンとして
ゐるあなたを見てゐるとどんなおくびやうな人でも一しよに乗つて飛び出したくなりませう。それにあ
なたは報國號なんでももの。

今日海軍大臣さまから報國第八十二號東日本洋服號、報國第八十四號第一兒童號といふりつばなお名
前をいたゞいたのですよ。うれしいでせう。ごらんさい海軍の方々のお顔もあなたが生れるまでいろ
／＼おほねおり下さつた方々のお顔もニコ／＼してゐます。もうおきこの飛行場を飛びしたら航空母艦
にのせられてお國の空を守る重なお役目につくのですか。それでは元氣一ぱい飛び出して力一ぱいお國
のために、天皇陛下の御ためにりつばなおはたらきをして下さい。あなたにつゞいてあなたのお仲間と
なる第二、第三の兒童號も近く生れ出る事になつてゐます。私たちは第四、第五ともつ／＼あなた
のお仲間をふやませう。

飛行機さん、飛行機さん、

私たちの報國號の飛行機さん、みごとなすがたの海軍の飛行機さん、きつと勇ましいお役目をはたし
て下さいね。

昭和十年九月七日

静岡縣師範學校附屬小學校尋常科第三學年

辻 陽 子

大日本模型飛行機聯盟事業

本邦に於ける模型飛行機は從來極めて少數愛好家の献身的努力により研究進歩の遂を辿り來たるもの
にして、従つて一般には普通玩具に對する認識を一步も出でず、之が主因とも云ふべきはその進歩向上
の推進をなすともいふべき模型飛行機競技會の如きが、多くはその材料商人の手によりて所謂賣らん哉
式に開催せられる状態にあつたが爲めである。それは又一面に於て動もすれば模型飛行機の科學的生命
を輕視されるの寒心すべき状態に惰する憾みなしとせず、本團に於ては之を矯正し以て斯界に寄與せん
として、昭和十年大日本模型飛行機聯盟を設置し、有志を集めて積極的運動を開始したのである。
その初期に於ける本聯盟は單に模型飛行機競技會を指導純化する程度に過ぎなかつたが、特筆すべき
は昭和十四年七月、東京市教育局の諒解並に協力を得、各關係官廳後援の下に開催せる市内小學校手工
科訓導に對する兒童航空教育講習會が、劃期的成果を收め、遂に本團が希求し來れる模型飛行機の理想
的普及はその第一步を之により踏出したことである。

同講習會は第一次第二次に分ち、第一次は東京市内三十五區の手工部長又は之に代るべき手工科訓導
を本團に集めて七月八日より三日間、山崎好雄氏以下鍊達の専門家指導の下に理論及び製作實習を行ひ
概ねライトプラン製作の指導をなし得る程度の成果を得た。尙本講習會開始に當りては陸軍航空本部陸

軍航空兵少佐西原勝氏、文部省囑託關口隆克氏、東京市教育局視學課長菊地龍道氏、同視學宮本幸惠氏、同視學囑託山下俊三氏、帝國飛行協會普及部長井上四郎氏等臨席せられ、模型飛行機を以てする児童航空教育の重要性を力説され且激勵せらるゝところがあつた。

第二次は第一次講習會の指導者を四乃至五班に分ち、之に第一次講習會參加訓導を適宜配して第一次同様の講習會を全市小學校手工科訓導に對し實施したのであるが、參加各訓導の之に對する熱意は想像以上のものがあり、所によりては午前八時より午後七時過まで折柄盛夏の熱汗を拂ひつゝ講習に専念し夜空に快翔する自作のライトプレーンを見上げて指導者諸共感激するの有様であつた。即ち児童に對する模型飛行機教育の第一歩は斯くして昭和十四年の盛夏を以て健全に發足したと云へるのである。

爾後本講習會に對する反響は甚大なるものがあり、全国各地より開催を希望し來るもの無數にして、又本講習會類似のものが續々と全国各地に開催されるに至りしことは本團の衷心より欣快に堪へざるところである。また一方學童を主體とせる本團主催競技會は學校當局とよく連絡指導をなせる結果一糸亂れざる統制の下に極めて好成绩を收め、會を重ねるに従ひ進歩向上のあとは著しきものがあるのである而して児童を對照とせる競技會なるに鑑み、團體精神を尊重して競技出場を學校單位とし、出場校の成績はその學校兒童の總得点を以て各校の順位を決定し、個人成績は常に第二義的に取扱つたのであるがこれがため各學校の出場兒童は引率訓導の下に一致協力して競技に従ひ、こゝに競技以外の方面に於て

も無形の精神的收獲を得るところ大であつた。

本團（本聯盟）に於て主催せる模型飛行機競技會は本團創立以來大小三十數回に及ぶのであるが、最近のものは昭和十五年十一月二十三日東京代々木練兵場に於て開催したる第三回東京市學童模型飛行機競技大會である。本競技會は陸海軍航空本部、航空局、東京府學務部、東京市教育局、大日本飛行協會東京日日新聞社の後援を受け參加小學校二十四、競技種目をライトプレーン及びグライダー（高等科兒童）としたものであつたが、前年の第一回競技會當時十秒乃至二十秒の滯空に甘じたるものが早くも一分を超過するもの續出するの進境を示し、ライトプレーンに於て一分二十五秒四、グライダーに於て三分四十秒の大會記録を生む好成绩であつた。その他大會參加兒童の秩序ある行動はいよゝゝ美事なるものがあり、茲に於て學童航空教育の前途は誠に洋々たるものあるを感せしめ、將來本邦模型飛行機の發展進歩は一つに學童航空教育の強化に俟つべきを痛感せしめられたのである。

尙本大會には畏くも伏見宮博明王殿下、賀陽宮章憲王殿下、賀陽宮文憲王殿下、李鍵公妃殿下、李仲殿下、李沂殿下の各御台臨を忝うし、且つ本團献上の模型グライダーをそれ〴〵御嘉納賜はりしことは無上の光榮とするところである。

滿洲國へ派遣せる少年少女航空親善使節團

滿洲建國以來本團に於ては機會あらば團員を以て編成せる親善使節を滿洲に派遣し、同國少年少女と交驩の傍ら共に日滿兩國の有つ使命を認識せしめ、更に各戰蹟を見學せしめて以て先輩將兵の偉勳を偲ばしむる事の極めて肝要なるを痛感しむたりしところ、昭和十三年七月滿洲飛行協會より別項趣意書に記載せる如き要請に接したるを以て直に之を快諾し、諸計畫を樹てたる上關係官廳の諒解を得、且つ本團維持團員各位の物質的後援に浴して急速に實現し、別項の如き編成の下に同年九月二十六日一行は東京發行動豫定（別稿行動日誌參照）に従ひて行動、親善の實を擧げ、十月十二日任を果して東京に歸着したるものなり。

大日本飛行少年團少女航空親善使節遣滿趣意書

友邦滿洲國ノ健全ナル發達ヲ期シ以テ東亞和平ノ大計ヲ樹ツルハ我ガ帝國ノ使命ニシテ今ヤ帝國ノ犧牲的協力ハ着々トシテ所期ノ發展ヲ同國ノ凡ユル施設ニ見ツ、アリテ、我等ノ私カニ同慶ニ存ズルトコロナリ。

然レドモコノ大業ハ一朝一夕ニシテ望ムベカラズヨロシク漸進微功以テ鞏固ナル基礎ノ上ニ不減ノ成

果ヲ成ササルベカラズ、而シテ之ガ達成ニハ兩國少年少女ヲシテ純真ナル協和精神ノ下ニ固ク手ヲ握ラシメ共ニ兩國親善ニ努力セシムルヲ要スルヤ言フ俟タズ、偶々本團ニ對シ滿洲飛行協會ヨリ來ル十月二三兩日、滿洲國都新京ニ於テ開催セラル、全滿グライダー競技大會ニ參加方ヲ要望シ來リタルニ就キ、コノ機會ニ於テ絃上ノ理想ヲ顯現セントシテソノ要望ヲ容レ、コ、ニ本團グライダー部員中ヨリ最モ優秀ナル少年少女六名ヲ選抜派遣セントスルモノナリ。

願クバ本團ノ趣旨ニ御賛同ヲ賜ハラントコトヲ。以上

昭和十三年八月

大日本飛行少年團

遣滿使節團編成 (十一名)

團長	本團々長	東條 政二氏	副長	同常務顧問	草野忠右衛門氏
教官	本團グライダー部教官	八田 一二氏			
團員	本團グライダー部員	高橋安五郎君	同	上	菊地 敏夫君
同	右	内田 和夫君	同	上	田口 政雄君
同	右	松岡 阜君	同	上	松平 和子嬢

同 右

山本登美子嬢 同 上

守安 素女嬢

少年少女遣滿航空親善使節團行動日誌

九月二十三日 金曜日 午後一時本部集合、飛行館屋上に整列、航空神社參拜、直に使節團結團式並に任命式を舉行す。

同式終了後、陸軍航空本部を訪問し、挨拶、本部長代理より、激勵の言葉を頂戴す。

それより使節團一行は役員一同と共に水交社に於ける海軍省海軍軍事普及部第二課長加藤大佐殿御主催の歡送晚餐會に出席加藤大佐殿より種々激勵の言葉を頂戴す。

九月二十四日 土曜日 午前八時松戸滑空場集合。少年少女遣滿航空親善使節歡送グライダー大會に参加す。午前九時より正午まで訓練。午後一時三十分より午後三時の訓練。午後三時團長、常務顧問、理事長來場、滑空訓練を視閲す。

此處で使節一行の出發に際しての挨拶と、部員の歡送の言葉があり、團長の發聲により萬歳を三唱して終了す。

尙午後五時より、格納庫内に於けるグライダー部主催の歡送お茶の會に參列す。

九月二十五日 日曜日 午前九時三十分本部集合。午前十時二十五分本部出發宮城に向ふ。

宮城遙拜、靖國神社參拜、本團最高顧問林銑十郎大將邸を訪問挨拶、それより明治神宮參拜、その歸途海軍館に寄り、片翼の樫村機、片肺の大串機などを見學す。

午後一時五分本部歸着、飛行館にて晝食す、發送荷物の準備、三時四十分解散す。

九月二十六日 月曜日 午前九時本部集合、荷造り。午前十時十五分本部出發、首相官邸訪問、秘書官を通じ挨拶、玄關前にて記念撮影をなす。

午前十時五十分厚生省訪問、大臣代理秘書官より激勵の言葉を頂戴す。

午前十一時五分航空局を訪問し長官代理より激勵の言葉を頂戴す。

午前十一時四十分海軍省訪問 松島中佐より海軍省につき、いろ／＼のお話を承る。

午後二時本部出發。文部省訪問午後二時四十分滿洲國大使館を訪問す。大使は親しく玄關先まで出られ丁寧なるお言葉を頂戴す。

午後三時帝國飛行協會訪問。航空神社參拜、後大日本青年航空團本部を訪問挨拶す。

午後六時十分飛行館中央亭に於ける、本部主催の歡送會に出席す。

午後七時本部前に集合、大日本飛行少年團萬歳を三唱して東京驛に向ふ。幹部役員を始めグライダー部員其の他關係者など、大多數の見送りを受く。尙、驛頭に於ては見送人代表として大日本青年航空團の宇高少將より激勵の言葉を頂戴す。

午後九時大歡送裡に一行は元氣一杯、東京驛を後にして一路目的地へと向ふ。

九月二十七日 火曜日 午前七時五十一分大阪驛にて、同地本團並に、航空婦人會の關係者多數の大歡送迎を受け、一路西下。岡山に於ても盛大なる歡送を受く。

午後六時十六分下關驛着。乗船までの時間を利用して同市役所觀光課の案内を得て、龜山神社、日清講和條約締結の春帆樓、赤間宮などを見學參拜す。午後九時五分一行は關釜連絡船に乗船す。なほ此際、下關市在住の本團正團員の歡送を受く。

九月二十八日 水曜日 午前五時起床、午前六時十分使節團一行朝鮮半島へ第一步を印す。午前七時三十分發奉天行「のぞみ」號にて北上京城に向ふ。午後三時四十分京城へ無事到着す。驛頭には飛行協會關係者、航空少年團、京城健兒團、本團京城在住の正團員等が盛大に出迎へられたり。先づ驛前三重旅館に荷物を下し、京城神宮に參拜す。

九月二十九日 木曜日 午前八時五十分恩賜科學館に向ふ。此の科學館には天然自然物を始め、現代化學の粹を集めたる諸機械類まで多種多様あり、殊に防空模型室のスキッチを順番に入れて行くと、防空の順序がはつきりと解り、本當の防空演習を小さくせるが如き模型で非常に參考となれり。

午前十時五十分朝鮮總督を訪問す。南總督には親しく一行を引見され次ぎの如き一問一答を行ふ。

總督「私が朝鮮總督の南大將である、氣を付け！ 番號一番から九番まで一人々々年齢を言ふて見よ

一番、何の目的でやつて來た」八田團員「全滿グライダー會員と航空親善を行ふ目的でやつて來ました。」總督「二番、全國に多數の團員があるのに何故に九名しか來なかつた」高橋團員「われ／＼は遣滿少年少女航空親善使節と云ふ大使命遂行のため特に選拔されたからであります」總督「三番、大日本飛行少年團はいつ出來たか」内田團員「昭和七年であります」總督「何の目的で入團したか、四番答へて見よ、菊地團員「航空知識の研究と同思想の普及を目的としました」總督「航空思想普及は何故に大切か、五番」田口團員「これからの戦は空中戦であります」總督「六番滿洲に行つてどうするのか」松岡團員「われ／＼團の最大目的である日滿少年少女の航空思想を通じての親善をはかるのでありますから、滿洲の人々とグライダーを通じて仲良になります」總督「朝鮮に來てどんな感じがしたか、善かつたら宜い、悪かつたら悪いと正直に言つてごらん」松平團員「釜山に上陸した時は私が思つてゐたのと餘り變りなくごみ／＼してゐたが、京城に來て、朝鮮神宮から府内を見ました時は、なんと綺麗な街でせうと思ひました」以上の如き總督との一問一答を行つた後、訓辭を受けたが、慈父の愛兒を諭す如き言葉に團員一同非常に感激す。

正午總督府裏に所在の慶會樓に於て行はれたる歡迎午餐會に列席せる後京城日報社を訪問す。午後三時四十五分、飛行協會關係者、航空少年團、京城健兒團、本團京城在住正團員多數の歡送裡に、奉天行「のぞみ」號にて新京に向ふ。

九月三十日 金曜日 午前七時四十分奉天着、午前八時三十分發の列車にて北上す。午後三時四十分新京驛着、滿洲飛行協會關係者、航空少年團、市公署關係者、多數の歡迎裡に無事入京す。午後四時旅館出發、新京神社參拜、宮廷府遙拜、歸館、休養す。

十月一日 土曜日 午前九時十五分ホテル出發。忠靈塔參拜、關東軍司令部、大日本帝國大使館、安東部隊、駐滿海軍部、民政部、國務院總務廳、交通部、外務局を訪問、挨拶。外務局に於ては午餐會に招待を受け列席す。

午後零時四十五分一旦歸館の上、輕装して、飛行場に鎌田部隊を訪問後、新京支部員と共にプライマリーにて各一回宛練習をなす。

午後六時五十分西廣場滿鐵社員クラブにて行はれたる講演と映畫の夕に列席、我々一行の紹介あり。團長よりは本使節の使命を詳しく講話す。

十月二日 日曜日 本日は雨が降り、大會は明日に延期されたる爲め、陸軍病院訪問、挨拶、慰問す。午後零時四分ホテル發、驛前の觀光バスにて二時頃より、市内の名所、戰跡地を見學せり。寛城子、南領の戰跡地に於ては、戦ひの當時の模様を詳しく承り、思はず頭を下ぐ。午後六時より國都飯店に於て開催せられたる、晚餐會に招待を受け出席す。午後八時三十分頃盛會裡に終了す。

十月三日 月曜日 午前七時四十五分ホテル發、飛行場に向ふ、飛行場にはビュツカー・ユングマン

三機、ソアラ、セカンダリー、プライマリーの各種グライダー二十數機勢揃ひしあり、晴天に恵まれ、選手は元氣にて入場す、同時に本團も入場す。

午前八時四十五分國旗に對して敬禮。直ちに開會す、午前中はプライマリー班の競技で、午後は、ユングマンの高等飛行、ソアラの曲技飛行、パラシュート降下等行はる、尙使節團の滑空作業は非常なる好評を博す。

かくして午後四時成績發表、機體格納、賞品授與式があり、本使節團員もそれ／＼記念品を受く。

午後五時三十分より、滿航格納庫に於て、慰勞會開催され席上日滿少年交歡あり、盛會を極む。午後六時、萬歳を三唱して、使節團一行は、參會者一同の歡送裡に格納庫出發、關東軍司令部を訪問、別れの挨拶をなす。

十月四日 火曜日 午前九時三十分、滿洲飛行協會關係者を始め鎌田部隊長殿など多數の歡送を受け新京を發ち、奉天に向ふ。

午後一時四十三分滿洲飛行協會奉天支部關係者其他、官民、航空少年團員等多數の歡迎裡に無事奉天に到着す。驛より行進して奉天忠靈塔に參拜、同忠靈塔前にて、日滿少女交歡會が行はれ、それより奉天神社參拜、藤井部隊訪問、次いで陸軍病院、滿洲航空會社を訪問し、博物館を見學す。

十月五日 水曜日 午前八時奉天驛出發、同九時三十五分撫順着、大型自動車にて炭坑本社を訪問、

事務所にて石炭の採掘法、同炭田の歴史、年産額など種々詳細なる説明を聞き、それより自動車にて、石炭採掘の現場の見學に向ふ。終つて自動車にて撫順市を巡り、滿鐵社宅地を通過、炭鑛俱樂部兼ホテルに到着。こゝにて炭鑛會社招待の午餐會に出席す。午後零時四十五分同ホテル發、自動車にて奉天に向ひ、北大營の戰跡を見學す。

午後四時奉天市公署訪問、北陵に參拜、歸館す。

午後六時三十五分、飛行協會奉天支部より招待を受け、晚餐會に出席す。午後九時二十分閉會、直に歸館し、奉天支部關係者に見送られ午後十一時十分發の列車にて、一路大連に向ふ。

十月六日 木曜日 午前八時三十分大連着、驛頭に於て、大連少年團と交歡、東洋ホテルにて朝食、少憩す。

此の際、石橋航空官殿より、有益なる訓示を受く。

午前十時三十分ホテル發、大連神社參拜、忠靈塔參拜後、團長は官衙訪問、團員は滿洲資源館を見學す。

午後一時大連發金州へ向ふ。南山の戰跡地、金州城内、ラヂオビーコン設置所等を見學す。

午後四時三十分金州發、五時三十分大連着。ホテルに少憩の後、午後六時四十五分頃、滿鐵社員クラブにて、滿鐵航空研究會招待の晚餐會に出席、研究會員と共にグライダーを通じ種々、經驗希望等を交

して午後九時終了、直ちに歸館、大連飛行場、關東支部合宿所に宿泊す。

十月七日 金曜日 午前八時三十分より、同飛行場にて同乗飛行を催され、三名づゝ四回にわたり秋晴れの大空を快翔し久ぶりに壯快な氣分を味ふ。午前九時五十分飛行場發、營城子古墳、鈴木双樹園、水師營會見所等を見學す。

陸軍航空本廠訪問、晝食し、これより團長は旅順訪問、團員は戰跡記念館見學、こゝで再び合し、東鷄冠山北堡壘を見學す。當時の惡戰苦闘の様子を詳細説明され、自然に頭の下る思ひす。午後五時白玉山に參拜す。

十月八日 土曜日 午前八時半飛行場に別れを告げ、東洋ホテルへ、更に埠頭へ。埠頭にて石橋航空官をはじめ大連の少年團滿鐵航空會員などに別れを告げて吉林丸に乗船。午前十一時船は一路内地を指して大連を解纜す。

十月九日 日曜日 十月十日 月曜日 航海中。

十月十一日 火曜日 午前七時三十分神戸に入港上陸す。大阪本部より近藤理事、京谷主任出迎へられたり。

先づ、湊川神社に參拜、午前十時三十分三ノ宮驛より大阪着、大毎、大朝、市廳、海軍人事部、府廳、陸軍病院、師團司令部、防衛司令部を訪問挨拶をなす。

大阪城見學、尙正午より平和クラブに於ける大阪本部主催の午餐會に出席す。

午後六時三十分より堀江花月樓にて於ける歓迎晚餐會に出席す。午後十一時、大阪本部、航空婦人會關西支部關係者等多數の歡送を得て一路東上す。

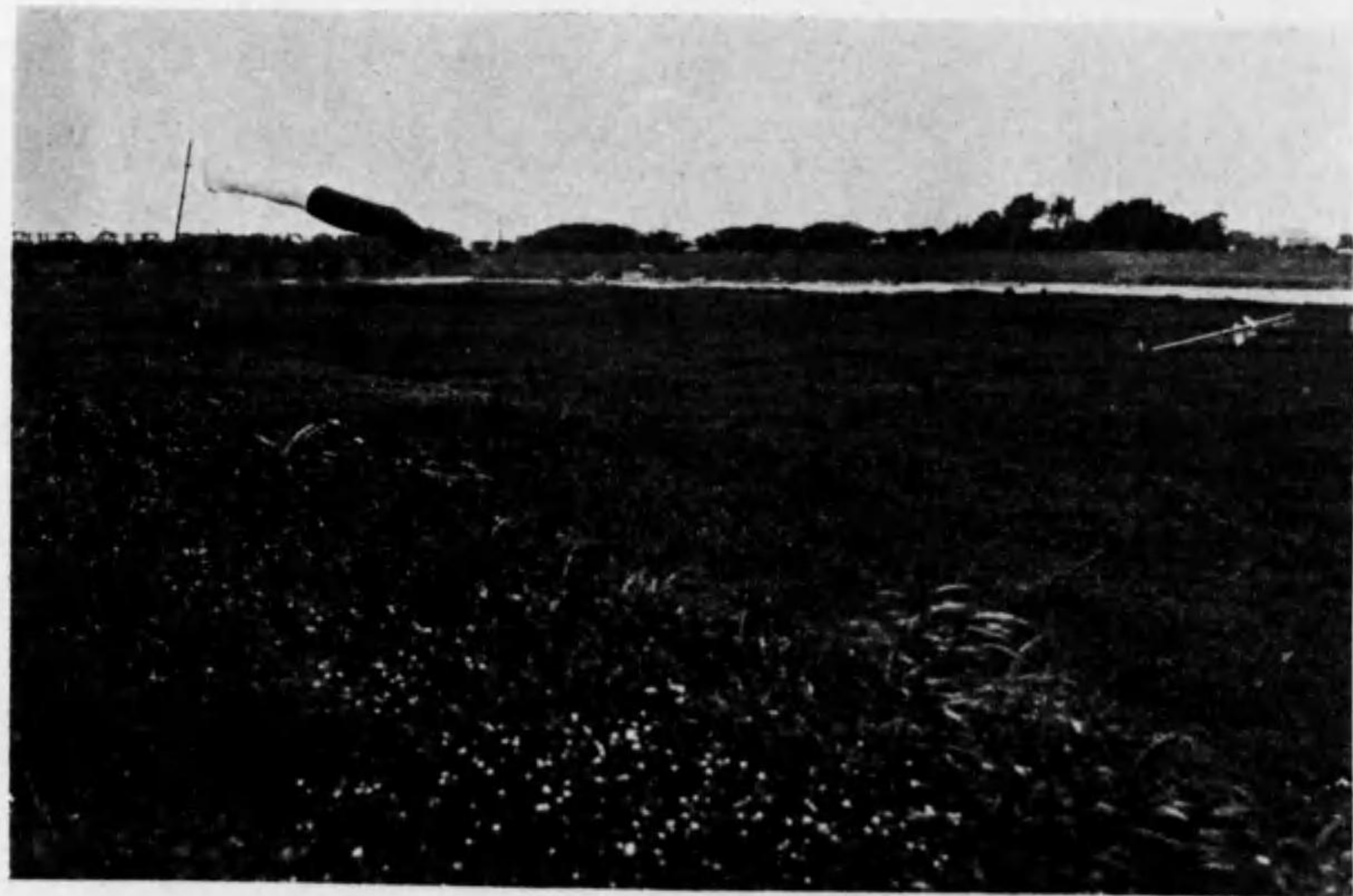
十月十二日 水曜日 午前七時、熱海着、つるや旅館にて、旅塵を洗ひ、休養、午後二時二十五分發東京に向ふ。午後四時四十五分、本團總本部、航空婦人會本部各役員關係者多數の歡迎裡に無事歸京、直ちに宮城を遙拜し、なつかしの本部に歸着す。

午後五時三十分頃より中央亭に於いて夕食す、續いて、六階講堂に於ける、歡迎會、報告會に列席す。團長より、東京出發以來本日までの行程を詳しく報告、少年少女代表として、高橋團員、松平團員の挨拶、草野常務顧問の謝辭があり、第一部を終り、第二部の映畫等あり、十時半頃解散す。

十月十三日 木曜日 午前十時本部集合海軍省、航空局、厚生省、文部省に歸京挨拶言上の後、水交社に於ける加藤大佐殿の招待によるレセプションに出席す。午後一時半、團長、理事長、常務顧問の訓辭あり、こゝに使節團は芽出度解散せり。



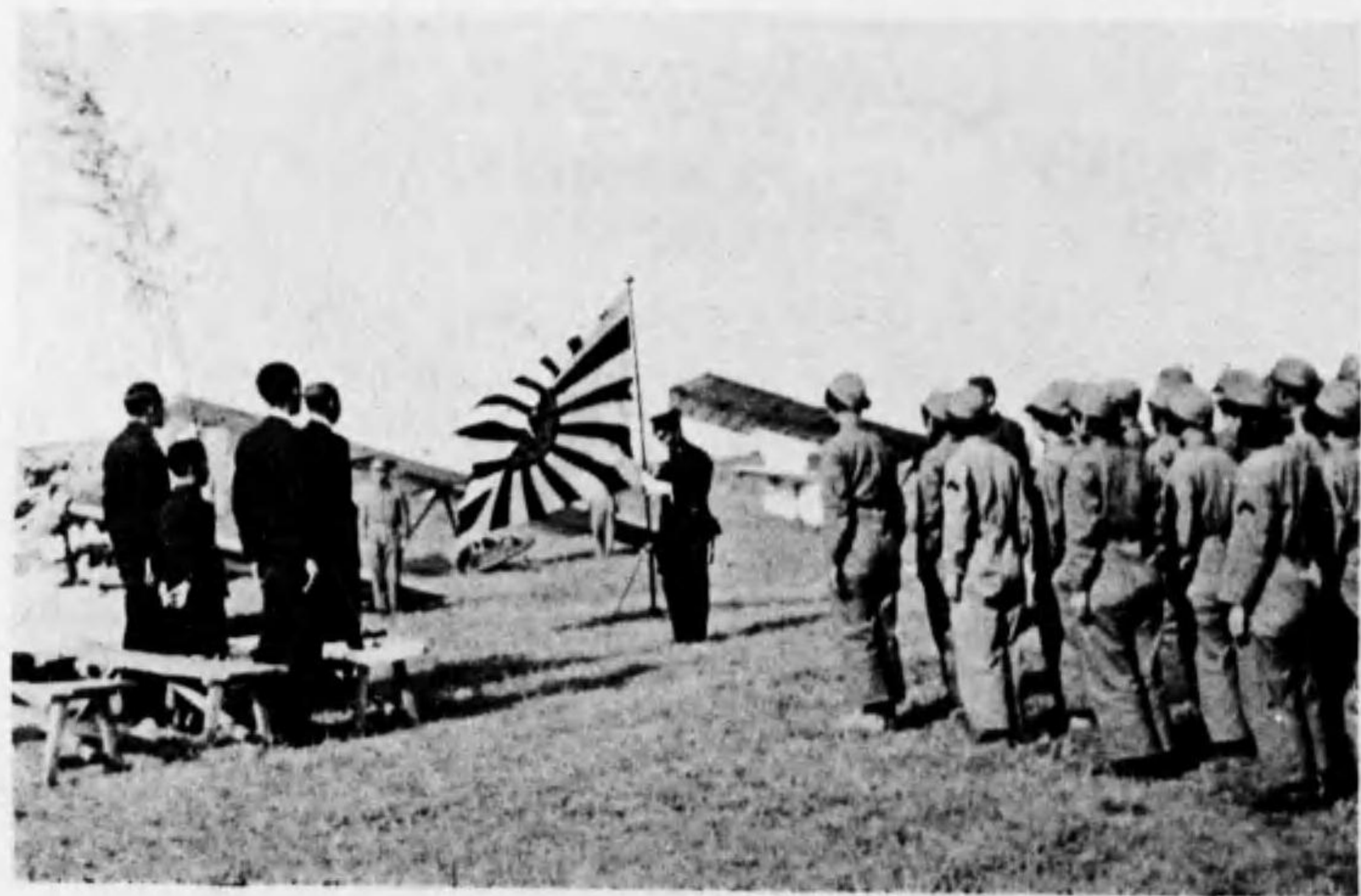
本團松戸訓練所格納庫全景



本團專用松戸滑空場の一景

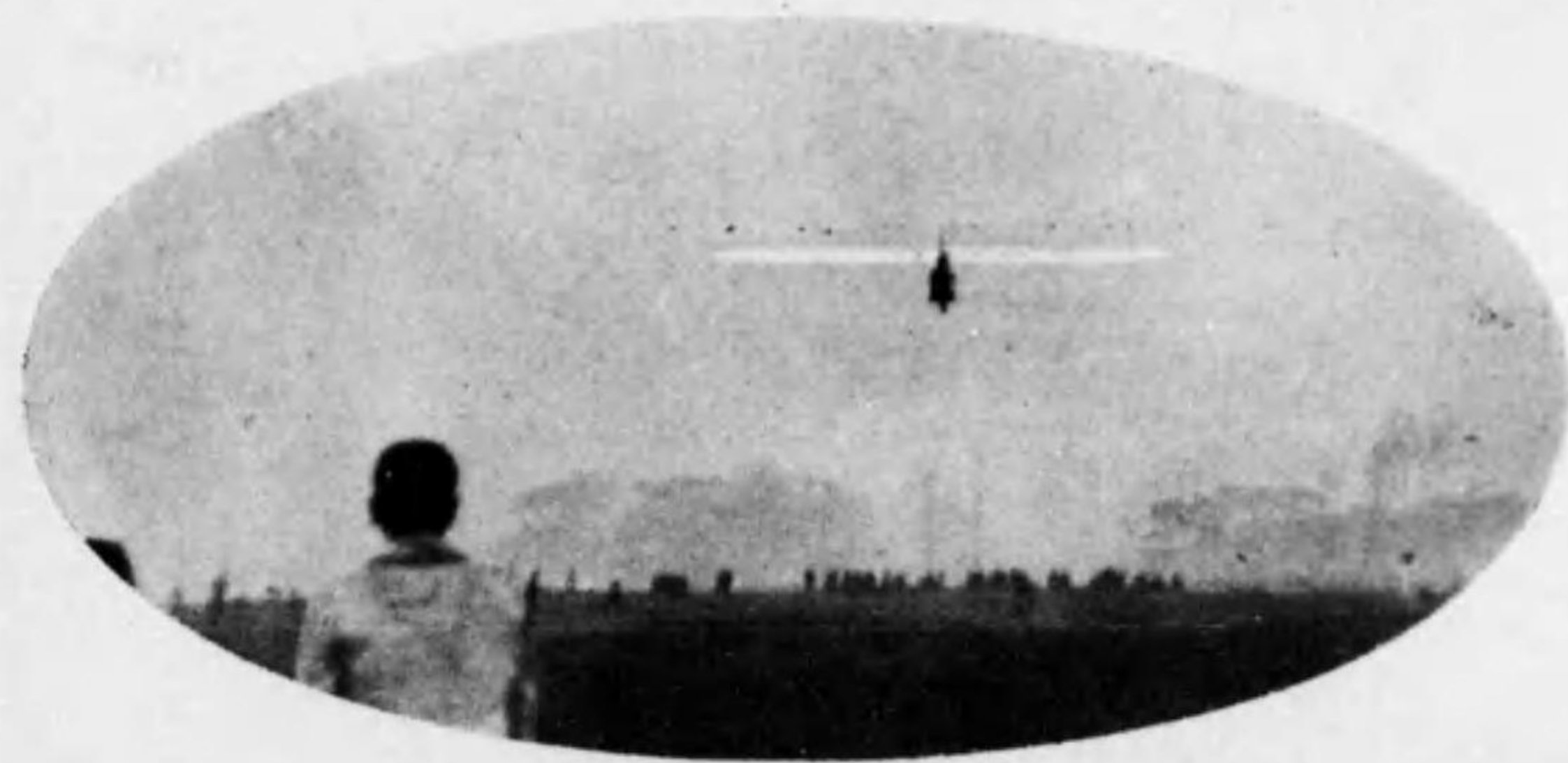


部行飛るけに於に堂講校學行飛本日場行飛京東
 (年二十和昭) 講受科學の生習練



朝をーリマイラブの贈寄りよ氏彦良田朝 式名命ーダイラダ
 (戸松於月二十年二十和昭) 長團條東る寸名命と號田

昭和十年十二月一日代々木練兵場に於けるグライダー部發會式(中)同發會式に於ける初滑空式



昭和十二年五月一日東京飛行場日本飛行學校
 に於ける飛行部發會式



將少上井長部及普會協行飛國帝るらせ閱視を部ーダイラダ
 (戶松於月三年三十和昭)



月一十年五十和昭)會大技競機行飛型模童學市京東催主團本
 (場兵練木々代京東於)

節使善親空航滿遺女少年少團本



團節使の問訪臣大部通交國洲滿



鎌田部隊訪問の使節團(中央鎌田部隊
 長その左東條團長)





生駒の連峰を背に猛訓練（於大阪府津飛行場 昭和十五年八月）



冬季合宿セカンダリー訓練（於市川市國府臺東練兵場）
下は冬季合宿訓練の楽しみキャン
プファイヤー（於松戸 昭和十二
年一月）



合宿訓練

軍隊式訓練を物語る日課表（於松戸 昭和十一年十二月）

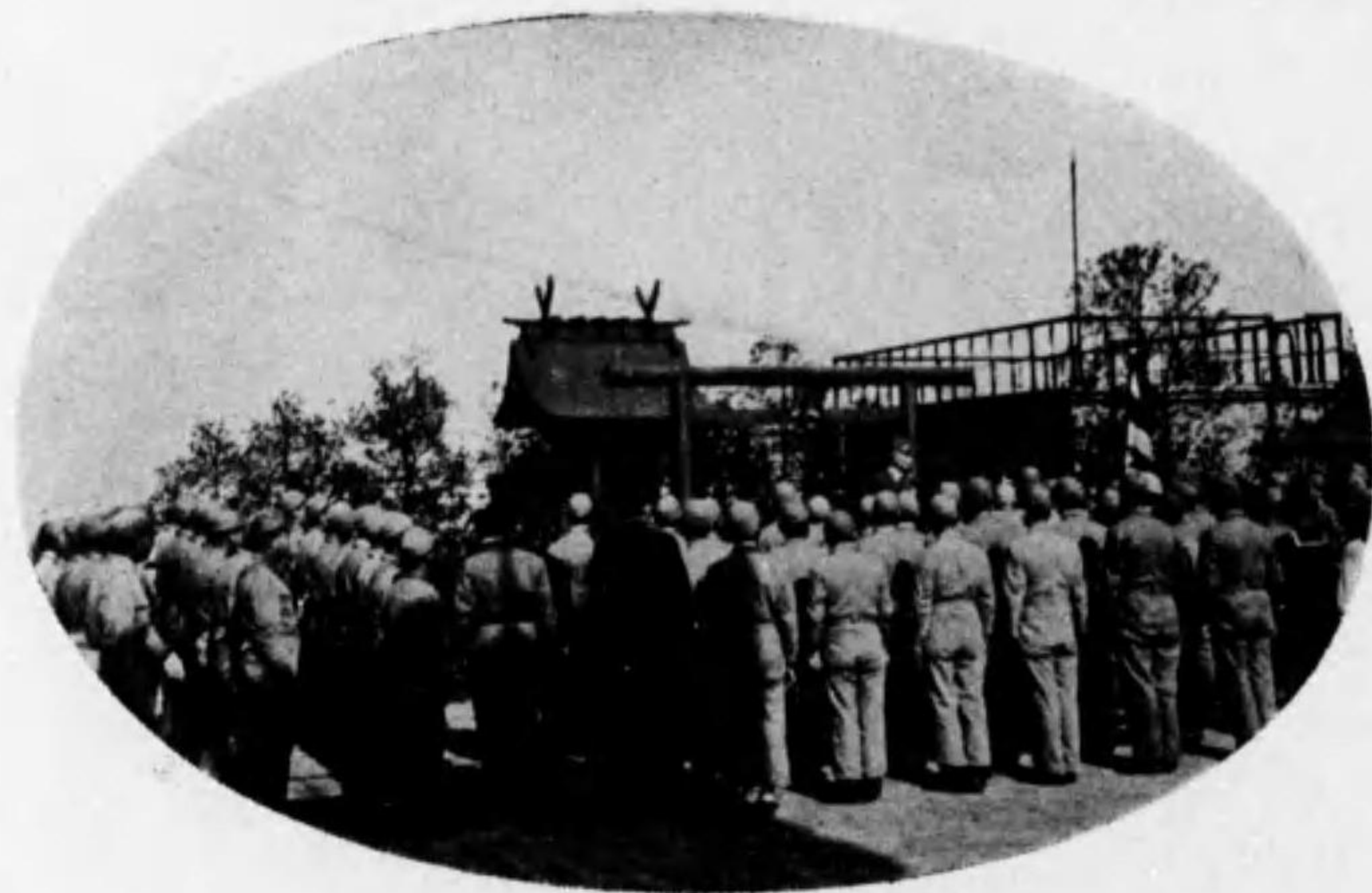


場兵練東臺府國川市於）食晝いし樂
（月三年五十和昭



自動車牽引法によるセカンダリー訓練
（於大阪府津飛行場・昭和十五年八月）





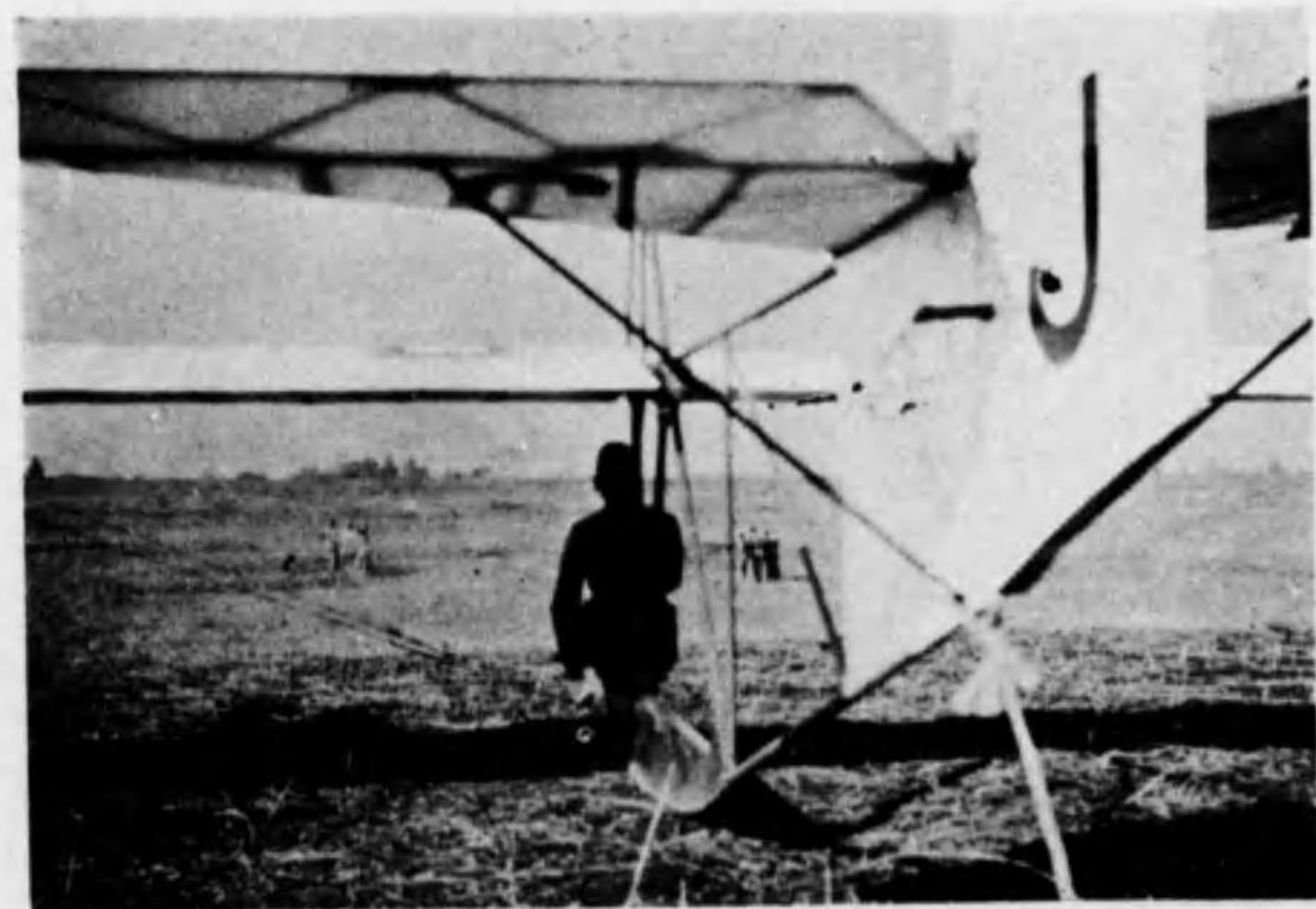
新入部ダイラグ飛行部練習生に訓示する東條團長
 (昭和三十三年二月十一日飛行館上航空社前)



中年の日曜祭無休で訓練した本団ダイラグ部を
 おいて他にない。従って新開・雑誌・映畫を通じた本団が
 空想普及に及ぼした力は大きい。



飛び正一下令の教官
 飛び出すとダイラグ
 出さんとするダイラ
 ころして松戸滑空場
 けるダイラグの滑空
 数は開設以来二萬回
 達してゐる。

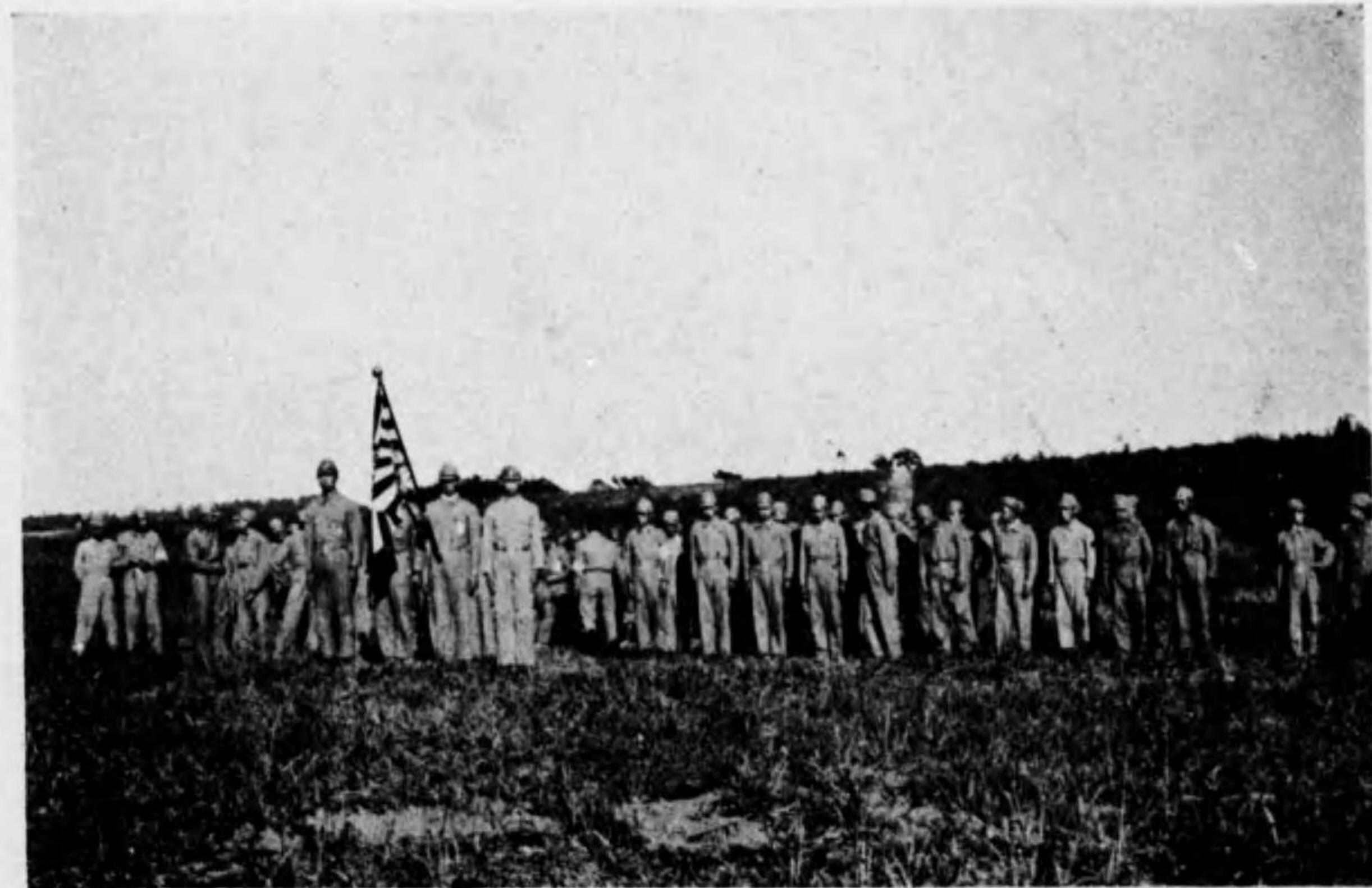


本団ダイラグ部訓練は常に軍隊式規律の下
 に之を行ひ又滑空技術のみならず滑空場の地
 均し、草刈等もすべて練習生の手により行ひ
 來つた、即ち松戸滑空場には彼等の尊い汗が
 にじみ込んでゐるのである。





松戸の空を快翔するカダンリ



松戸滑空場に勢揃ひした教育隊員ラグダイ・飛行部・少年隊員

大日本飛行少年團グライダー部沿革

昭和十年十二月一日東京代々木練兵場に於て本團グライダー部發會式を舉行す。

本團顧問高田陸軍中將、帝國飛行協會井上海軍少將、霧ヶ峰グライダー研究会會長藤原博士、磯部海軍機關少佐、ライオン齒磨本舗小林副社長（グライダー寄贈者）、吉原飛行士其他名士多數參列の下に先づグライダー（ライオン第一號）の贈呈式を神式に依り舉行の後、東條團長グライダー部の發會を宣し、帝國飛行協會長の祝辭あつて式を閉ぢ、それより吉原飛行士の統率する霧ヶ峰グライダー研究会員二十數名による模範滑空を展開す。蓋し東京代々木に於ける最初のグライダー行事たるべく參觀者數萬に及べり。

昭和十一年八月二日千葉縣東葛飾郡松戸町上矢切地先江戸川河川敷に帝國飛行協會に於て専用飛行場地域を設置せられこれを本團専用滑空場として管理し、訓練を開始す。

（別項本團沿革中、松戸滑空場地鎮祭の部參照）

尙グライダー部は爾後、毎日曜日、祭日及び學期末休暇等を利用して訓練を繼續實施す。格納庫は近く建設の豫定なるもそれまでは附近の寺院寶藏院に依頼してその軒下に分解の上假格納のこことす。

第一期練習生七十名入部す。

同年八月三日より六日間グライダー講習會を開催す。

但し當時は滑空場地面の地均し及び除草は未だ完全ならず、練習生はグライダー練習と共にこれが整地作業を常に怠らず徐々に自らの努力を以て整地の歩を進めたり。

當初のグライダー部指導者は部長山田新吾、教官吉原清治、八田一二、山口正、新堀巖の諸氏なり。當初に於ける練習生狀況

昭和十一年は本邦グライダー界がいよゝく大衆に接近した年とも云ひ得べく、本團グライダー部が帝都に最も近接した滑空場たる松戸に於て訓練を開始したことは、關東地方に於けるグライダー熱の勃興に至大の寄與をなしたり。

更にグライダーに對する興味が特に一般青少年層に持たれ初めた證左として練習生募集の件が一度新聞紙上に傳へらるゝや即座に定員の數倍の應募を見たり。

同年十一月二十九日グライダー部第二期練習生五十五名の入部式を舉行、同時にライオン齒磨本舗より寄贈相成りたるグライダー格納庫(三十二坪)及び附屬建物の贈呈式を舉行す。

滑空訓練に於ては滑空場、格納庫、機材の三者の何れが一つ缺くとも完全なる用をなさず、本團グライダー部が今日まで格納庫を有せず、練習毎に附近の寶藏院の軒下を借用して分解格納し又組立使

用の勞を費し來つた不便を思ふにつけ、今回格納庫建坪三十二坪、休憩室五坪(八疊間及土間)井戸の設備が完成せしことは、旱天の慈雨以上の喜びに外ならず、訓練は茲にいよゝく本格的に開始されたり。尙所有滑空機は何れもライオン齒磨本舗より寄贈されたる日本式鳩型プライマリー(ライオン第一第二號)の二機なり。

同年十二月二十九日より

昭和十二年一月三日迄の六日間グライダー部練習生中の希望者三十名を選抜し冬季合宿訓練を実施す。

同年三月第三期練習生五十名を募集す。

(註) 本年六月一日本邦に初めてグライダーに關する法規即ち滑空機規則が制定され、總則、検査、試験、乗員、運航等の規範を公示されたり。

これによりグライダーは曲技を行ひ又は他の航空機に曳航され得る性能並に強度を有するものを甲種滑空機、然らざるものを乙種滑空機の二種に分類され甲種は羅馬字の大文字A、乙種は同じくBを以て種別記號とし、検査番號はそれゝアラビヤ數字を以て表示することに定められ、本團滑空機二機はB1104、B1105と改定された。又乗員は一級及び二級滑空士に分ち、運航練習の指導は乗員に非らざればなす能はざることとなりたり。

同年七月十八日第三ライオン號、積善第一號、第二號の命名式を舉行す。

既に二機のグライダーを本團に寄贈されたライオン齒磨本舗に於ては今回更に日本式鳩型プライマリ一機を寄贈され、同時に原田積善會よりは日本式鳶型セカンダリー一機、伊藤式A二型プライマリ一機計二機を寄贈され、本日夫々前記の如く命名す。尙本日は本團グライダー部及び明治中學校航空部、東京市役所グライダー部参加の下に競技會開催の豫定なりしも折悪しく江戸川の増水甚だしきため滑空場の使用不可能となり中止す。

尙今回寄贈されたる三機と從來の二機を合して計五機を數へるに至り本團グライダー部は斯界にいよいよ重きをなすに至る。

(註) 七月三十日より長野縣霧ヶ峰に於て本年初めてグライダーの神宮競技會が開催せられ、本團グライダー部も参加の豫定なりしところ、同競技會は支那事變勃發のため無期延期されたり。

八月十三日本邦最初の遞信省航空局の二級滑空士試験が施行さる。その試験に課せられたる問題は次の如きものなり。

- 一、左ノ各項ニ答ヘヨ
- イ、滑空機ノ操舵面積ハ飛行機ノソレニ比シテ何故大ナルカ
- ロ、沈下速度トハ何カ
- ハ、最良滑空角トハ何カ

二、斜面上昇風ニ就テ説明シ滑空上ノ利用法ヲ述ベヨ

三、左ノ各項ニ對シテ規則上ノ説明ヲナスベシ

- イ、滑空機ノ種類
- ロ、滑空機乗員ノ航空免狀ノ種類及ビ權限

同年九月十二日第四期生五十五名の入部式を舉行す。

八月前部長山田新吾氏出征されたるを以て總本部職員内田丈市氏グライダー部長に就任し本日より訓練に参加す。

同年十月十五日内田部長、八田首席教官、高橋安五郎、白石繁司、野口忠衛、松平和子、山本登美子各練習生は野溝理事長引率の下にグライダー滑空場調査並に航空思想普及の目的を以てプライマリ一機を携へて新潟縣小千谷飛行場に出張、多大の成果を收めたり。

尙本出張は小千谷町役場當局の希望に基くものであつたが同地に於てはグライダーは全く初見參のこゝとて附近町村は元より長岡市方面よりの參觀者甚だ多く、グライダーを見てこれに人が乗れるのかと不思議がる程度のもので、同地小千谷中學校生徒を使用しての實演には文字通り、驚異の眼を開く有様であつた。これが動機となりて小千谷中學校には直にグライダー部結成の氣運が醸成され翌年早くも之を實現して今日の隆盛をなしたるものなり。

同年十一月七日松戸滑空場に於てグライダー部、飛行部合同の大運動會並に滑空競技會を開催す。

同年十一月二十一日第五期練習生五十名入部す。

同年十二月二十五日東京市本郷區湯島町朝田良彦氏より日本式鳩型プライマリー一機を寄贈され本日命名式を舉行朝田號と命名す。

同年十二月二十九日より昭和十三年一月三日まで冬季合宿訓練を実施す。

参加者内田部長、八田首席教官以下グライダー部員二十九名、飛行部員五名、一般よりの参加者十九名計五十三名なり。

尙右人員中には新潟縣小千谷中學校熊倉教諭以下職員生徒十一名を含む。

昭和十三年二月十一日全員建國祭並同行進に参加したる後飛行館屋上航空神社前に於て第六期練習生四十五名の入部式を舉行す。

右第六期生の入部を迎へてグライダー部在籍人員二百名を超ゆるに至り、一方グライダーも六機を數ふに至り、四季を通じて日曜日祭日休みなき訓練の繼續に、今や全國にその充實せる陣容を誇り得るに至る。訓練は單に滑空技術の演練に止まることなく、教練、機體修理法、地上整備作業等も大いに獎勵す。

同年三月二十五日より三十一日に至る一週間春季合宿訓練を実施す。

合宿参加者は五十名なりしが今期合宿訓練には本團グライダー部員の外に新潟縣小千谷中學校熊倉教諭を始め茨木工業學校より五名、本團大阪地方本部グライダー部より十名の男女部員等が参加し、恵まれたる小春日和の江戸川畔に空に志す少年少女の意氣を大いに吐く。

同年六月十二日第二格納庫完成す。

豫てライオン齒磨本舗より寄贈の下に建設中なりし第二格納庫完成に就き本日竣工式を舉行す。本格納庫は間口六間、奥行十二間、七十二坪にて組立てたる機體七機の收容可能にして、従つて第一格納庫は爾後主として部員室、修理室、講堂に使用する事とす。

尙本日は第二格納庫竣工を記念して滑空競技會を開催せしところ本團グライダー部の外に巢鴨學園グライダー部、茨木工業滑空部等の参加ありたり。

同年六月十五日原田積善會より伊藤式A二型プライマリー、霧ヶ峰式鳩型プライマリー各一機寄贈さる。

第五積善號、第六積善號と命名す。これにてグライダーは計八機となる。

同年七月一日練習生中より内田和夫、菊地敏夫、加藤信三、田口政雄の四君大日本青年航空團に入團本日その訓練地盛岡に向け出發す。

同年七月三日第七期練習生五十名の入部式を舉行す。

同年度グライダー部夏季合宿訓練は左記の如く四回に分ちて實施す。

第一次は七月二十五日より同三十一日までの一週間とし、これにはグライダー部員中の比較的鍊達の者を選んで参加せしめ實施し

第二次は八月十二日より同十八日までの一週間とし、これには一般希望者をも含めて實施し

第三次は八月二十日より二十二日までの三日間として全部女子の初心者を集めて實施し

第四次は八月二十九日より三十一日までの三日間主として助教適任者を集めて實施す

同年九月十一日日本團グライダー部員は本日初めて松戸を出でて千葉縣習志野の集鴨學園滑空場に赴き訓練を行ひ好成績を収めたり。尙當日は同學園生徒全員本訓練を見學す。

同年九月二十六日日本團少女遣滿航空親善使節團本日午後九時東京驛發滿洲に向ふ。

團長東條大佐、常務顧問草野忠右衛門氏、教官八田一二氏、グライダー部練習生内田和夫、菊地敏夫、田口政雄、松平和子、山本登美子の諸君。尙大阪地方本部グライダー部より高橋安五郎、松岡阜、守安素女の三君この一行に加はる。

尙はこの一行に對する歡送グライダー訓練大會は九月二十四日松戸滑空場に於て雨を衝いて舉行す。

同年十月十二日午後四時三十五分本團少女遣滿航空親善使節團晴れの歸京をなす。

(尙本使節團に關しては別稿同記事参照のこと)

同年十一月三日第八期練習生三十名入部す。

同年十二月二十五日より同じく三十日まで冬季合宿訓練を實施す。

本訓練参加者は合計三十五名、その中には佐世保支部(西海中學校)より三名、岡山支部より二名、大阪地方本部より六名計十一名を特に参加せしむ。

昭和十四年七月二十三日日本團主催、航空局、帝國飛行協會、讀賣新聞社後援の下に滑空訓練並に競技大會を開催す。

参加團體は帝國商業學校、木更津中學校、佐原中學校、巢鴨學園、千葉中學校、安房中學校、足立學園、帝國航空少年團、本團グライダー部の九、競技成績は團體優勝帝國商業學校、二等木更津中學校、三等千葉中學校、個人の部優勝帝國商業學校久保田保君、二等同吉富仁君、三等本團菊地敏夫君、四等佐原中學校黒田利郎君、五等帝國航空少年團船橋儀平君の順なり。

尙優勝校帝國商業學校に對してはライオン齒磨本舗寄贈の優勝旗及び讀賣新聞社寄贈の優勝盃を、以下それらに授賞す。

同年七月二十五日日本式鳩型プライマリー一機を購入整備す。

同年八月十二日より同十八日まで一週間合宿訓練を實施す。参加者三十四名、無事故にて極めて好成績を収めたり。

同年十月一日羽田東京飛行場に於ける空中ページェントに帝國飛行協會の要請により出勤、場内整理其

他に奉仕す。又同夜九段軍人會館に於て本團主催少年航空の夕に参加、プライマリー一機を壇上に飾りて參觀者に紹介説明して多大の感興を興ふ。

同年十二月十日、セカンダリー捲取装置の設置(ウインチ)成り、この日初めて松戸の空にセカンダリーの三百六十度旋回を實現す。

尙本施設經費は十月一日夜軍人會館に於て開催の少年航空の夕の益金によるものにして切斷器一式、ドラム、ワイヤー一千米、自動車は大和學團より借用す。

同年十二月二十六日より

昭和十五年一月一日まで一週間、冬季合宿訓練を實施す。参加者三十四名。

本訓練は本團最初のウインチ訓練なりしたため全国各地の團員より参加を希望し來る向き甚だ多く、選抜の上参加を許可せる者は東京二五、神奈川三、栃木一、千葉二、兵庫一、福岡一、岡山一なり。全期間好天氣に恵まれ、無事故にて一月一日終了せり。尙本訓練中十二月三十、三十一兩日は市川市國府臺東練兵場を借用實施せり。

同年三月一日伊藤式B二型セカンダリー一機及びウインチ用トラクタ一臺を購入整備す。同月第一格納庫内に二十一疊敷の部員室を新設す。

同年三月一日第九期生五十名入部す。

同年三月二十三日より四月五日まで十四日間(第一次第二次に分つ)二級滑空士受験合宿訓練を實施す。参加者指導者内田部長以下五名、練習生二十二名計二十七名。

本訓練は受験訓練なるに鑑み特に一級滑空士利根川薫氏を首席教官に委嘱せり。

三月三十一日を以て第一次となし、それより四月五日まで、十二名の受験資格者を残して第二次訓練を實施し、同日航空局航空官西澤亮平、試験係長伊東左内兩試験官を迎へて受験の結果、左記六名に對し四月九日附にて二級滑空士免狀を下附せられたり。

山口克巳(岡山) 小島知永(栃木) 内田丈市(東京) 馬場良則(山口) 高瀬正夫(東京) 松平和子(東京)

尙訓練經過の概要を示せば次の如し

一、期間 三月二十三日より四月五日までの二週間

二、場所 三月二十四日まで松戸、四月五日まで市川市國府臺東練兵場

三、使用機材 伊藤式B二型セカンダリー一、日本式鷲型セカンダリー一、霧ヶ峰式セミセカンダリー一、伊藤式A二型プライマリー二計五機、ゴム索二、牽引自動車シボレー型トラクター一、フォー

ドコンマーシャル一計二臺、牽引索八百米、切斷器其他一式

四、氣象狀況 全期間例年に似ず強風の日多く爲に訓練は終始豫定の進捗を見ざりしも参加者一同の一致協力によつてこれを克服し、受験前日には一同高度七十米、三百六十度旋回をなし得る程度の

技倆となれり。

五、本訓練中、高度目測及び旋回技倆未熟のため着陸の際地面に激突して機體(霧ヶ峰式セミセカンダリ)を大破せしも搭乗者は微傷もなく全期間を通じ極めて士氣旺盛に且つ無事故にて終了せり。
同年六月九日滑空日本滿十周年記念公開滑空訓練大會を開催す。主催本團、後援厚生省、航空局、陸軍航空本部、海軍省海軍軍事普及部、千葉縣、帝國飛行協會、讀賣新聞社。參加團體九。

訓練成績第一位本團グライダー部、第二位逗子開成中學校、第三位帝國商業學校、第四位木更津中學校、第五位茨木工業學校、第六位神奈川商工實習學校、足立中學校、第七位佐原中學校、第八位東葛飾中學校。以上の通りなるも本團グライダー部は主催團體の故を以て優勝を逗子開成中學校に譲り、同校に一等表彰狀、讀賣新聞社寄贈の優勝盃及び參加記念品を、以下各校に參加記念品を贈呈す。
本大會公開訓練中に於ける中級機模範滑空は利根川薫、松平和子、菊地敏夫の三氏操縦により實施す。主なる大會役員、大會々長東條政二、審査委員長男爵奈良原三次、審査員利根川薫の各氏以下。
尙本日第三格納庫(飛行機用)竣工式を舉行。來賓眞崎陸軍大將外多數ありたり。

同年七月二十五日より八月十八日に至る二十五日間大阪地方本部と合同して左記により受験を目的とする夏季合宿訓練を實施す。

一、期間 七月二十五日より八月十八日まで、但し更に七日間を豫備に充つ。

二、場所 大阪府中河内郡盾津村大阪陸軍飛行場。

三、人員 指導者七名、練習生二十一名、但し指導者中四名の二級滑空士には一級滑空士受験をなさしむ。

四、指導者 本團グライダー部長内田丈市滑空士、大阪地方本部グライダー部長山下常彦大尉、島吉正飛行士、小島知永、石井忠重、松平和子、廻間正輔各滑空士。

五、使用機材 ブライマリー二、セカンダリー三(中二機は東京より)ソアラ一、シボレー三九年限トラック一臺(其他牽引装置一式)一三式練習機一機、修理用資材若干。

六、受験八月十六日術科、翌十七日學科の順にて航空局より伊東試験官出張實施されたる結果、八月二十一日附にて左記の十一名にそれ〴〵免狀下附せられたり。

一級滑空士 小島知永(栃木)石井忠重(神奈川)松平和子(東京)廻間正輔(岡山)

二級滑空士 林明彦(大阪)松岡阜(大阪)關保之助(大阪)日向美智子(東京)菊地増吉(神奈川)岸上秋雄(東京)笠井昌佑(大阪)の諸君。尙、川崎弘君(東京)はその後學科を受験合格せり。

尙右の外術科のみの合格者七名ありたり。

七、約一ヶ月間の長期なりしたため訓練は終始餘裕を以て實施し得、人、機共に何等の故障なく八月十七日受験訓練を終了せり。

同年九月十五日第十期生五十名入部す。

同年十一月二十日より同二十九日まで内田グライダー部長は小島知永、松平和子、丸木良隆、菊地敏夫の各滑空士を引率して北海道函館市に出張、同市滑空協会加盟校の指導をなす。尙同二十七日は同滑空協会發會式に参加、同所屬滑空士上出松太郎、東武平兩氏に協力せり。

同年十二月二十一日より昭和十六年一月一日まで(中間十日間は市川市國府臺東練兵場)冬季合宿中級滑空機訓練を実施す。

参加者指導者五名、練習生二十二名。中級機訓練に就き初日及び最終日の外はすべて市川市國府臺東練兵場に於て訓練す。

昭和十六年一月一日 本年度訓練初め式を行ふ。

同年一月三日より同九日まで松戸に於て函館滑空協會の委嘱に依り同地中等學校教員二十三名の冬季合宿訓練を指導なすと同時に有志練習生の訓練を実施す。

本訓練はゴム索に依る初級機訓練なり。

同年一月現在グライダー部現状次の如し

部長兼指導者	二級滑空士	内田 丈市氏	指導者顧問	一級滑空士	利根川 薫氏
指導者	一級滑空士	小島 知永氏	指導者	一級滑空士	石井 忠重氏

指導者

二等飛行士	松平 和子氏	指導者	二級滑空士	高瀬 正夫氏
一級滑空士	岸上 秋雄氏	同	二級滑空士	日向美智子氏
同	菊地 増吉氏	助教	菊地 敏夫氏	
同	丸木 良隆氏	同	末田 太郎氏	

部員(練習生男子八十五名、女子二十二名計百七名)

機材一、日本式鷲型セカンダリー 一機

二、伊藤式B二型セカンダリー 一機

三、日本式鳩型プライマリー 二機

四、伊藤式A二型プライマリー 二機

五、霧ヶ峰式鳩型プライマリー 一機

六、牽引用トラック 一臺

七、右同鋼索 八百米及附屬品一式

八、其他關係諸器具 一式

九、格納庫二棟 計百九坪(外に飛行機格納庫一棟八十一坪)

一〇、修理用器具 一式

(附 記)

本團グライダー訓練の經過に對する所見概要

本團グライダー部練習生は、團員たる年齢十六歳以上の青少年少女たることを原則としたものであるが、特に訓練参加可能と認めたるときは例外をも認め、力めて多くの青少年少女に及ぼす如くした。

グライダー訓練は完全なる團體訓練に非ざれば到底所期の成果は望むことが出来ない。従つてその團體内に於ける凡ゆる結果はその指導者の責任に歸すべきものにして、指導者の委囑任命には特に意を用ひた。即ちグライダー訓練はよき指導者を得ればその目的の大半は既に達し得たりといふも過言ではないのである。

而して指導者として具備すべき要件は、教育訓練は飽まで指導者の自己擴張なるに鑑み、先づ被訓練者即ち練習生と共に何事をもなし得る潑刺たる意氣と常に率先垂範の熱意を有することである。而してその意氣と熱意に加ふるに人格を以てせば如何なる練習生と雖も感奮して起つべく、水火をも尙辭せざる犠牲的精神の持主となるのである。

グライダー訓練は又技術の向上に最大の成果を擧げずしては完全でない。世上動もすればグライダーは技術は問はず團體精神さへ涵養し得れば足れりと極言する向あるもこれはグライダーを以てする青少年指導上甚しく無責任の語と云はねばならぬ。技術を、換言すれば科學を無視してはグライダー訓練の生命はない。従つて指導者は教者たるに足る技能者に非ざれば用をなさざることを自覺すべきである。即ち如何なる名論卓説をなすとも實行力なき者に對しては、少く共グライダー訓練に精進する青少年達は一顧も之に與へないであらう。

練習生採用に當りては、體格、頭腦兩方面を調査する必要あり、就中體格は最も嚴重を要す。但しこの體格はその年齢及び性別に依り一定の標準を立つことは云ふまでもない。グライダー訓練が特に都會人の子弟としては可成過激の勞働を要求する必要があるに鑑み、肺失患の懸念ある者、又は虚弱性の體格者は親心より見て絶対に採用すべきではない。要するにグライダー訓練に参加して虚弱なる身體を強健になすといふは誤謬も甚しきものにして、健全なる體格をより強健にと考ふることこそ妥當と云ふべきである。頭腦は少なく共中以上たるを要す。然らざれば初級機訓練はまだしも中級高級機訓練に進むべき彼等として早晩行詰りに逢着するであらう。即ち理論を解し得ずして操縦技術を會得したとしても、それは單に物真似にすぎざる結果を招來すること明かであるからである。又一面中途に於て訓練を斷つことが本人は元より國家的にも亦大損失たることを忘れてはならぬ。

以上の如き要件を考慮して指導者及び練習生を選び昭和十一年八月訓練開始以來繼續し來つたのであるが、その結果は大體に於て初期の成果を擧げ得たものと信ずる。尙昭和十三年春文部省普通學務局より本團に係官來訪され、今後中等學校に奨励すべき滑空訓練計畫に就き本團グライダー部の現状を種々諮問され、参考に供せられたるは光榮ある思ひ出である。更に左記の各項は開設以來の經過に對する所見としていさゝか參考となると思ふ。

一、グライダー部入部志望者数は初期即ち昭和十一、十二年當時は一度新聞紙上に募集を發表すれば即座に定員の數倍に達する狀況なりしも、半面一旦入部して訓練を開始した曉に於て急減するを常とした。これはグライダーを單に一種のスポーツと考へて皮相なる觀察下に入部し來る者が相當あつたが爲と思はれるのである。然るに此の弊風はグライダーが一般に正しく認識せらるゝに従つて年と共に矯正され、昭和十五年頃よりは、志望者は募集定員と殆ど同數を數ふるに過ぎざる實狀なりしも著しく志望者のグライダー觀が着實となり、一旦入部せる者はあくまで初志を貫徹

するの風増加しつゝあるを見たり。

二、年少者及び女子に對してグライダー訓練をなさしむることは終始替否良論に接し、中には特に女子のグライダー訓練に就て強硬なる反對論をなす向きありしも之等は多く非専門的意見に過ぎず、過去五ヶ年間の経過に鑑みてもその反對は何等の根據を有せざるを確信し得るのである。而して指導者が年少者又は女子に對しては特別の考慮を訓練上に致し、日數その他凡ゆる點に於て男子の二倍の努力と注意を必要とする心意氣を以て當れば女子と雖も男子に劣らざる成績を示すのである。特に昭和十五年以降に於ける女子部員の成績はむしろ男子部員を凌ぐものがあつたことを特記して置きたい。但し女子に對しては理想的には鍊達せる女流滑空士を以てその指導者たらしむる必要を認める。この意味で昭和十五年中一級滑空士、二級滑空士各一名を女子部員中に出したことは心強き限りであつた。

三、本人は熱烈に航空界進出を志し入部を希望するも母親が一途に危険視して之を阻むために、已むなく斷念するといふ少年が募集毎に相當ありしに鑑みても、一般婦人に對する航空思想普及の急務を痛感するもので、この點に見るも若き女性に對するグライダー訓練は極めて有意義なりと信ずる。

また、一般に女子は細部に至るまで注意深く處理の念も男子に優るものと考へらるゝも、實際は反對の現象にてむしろ若き女性は男子よりもオホマカにて所謂投げ遣り多く、又生來號令により訓練を受くる機會を有せざるため團結心に乏しきを感じしめられるのであるが、之等がグライダー訓練を施すことによつて矯正されることは極めて意義深い問題と信ずる。しかも一度練習服を纏ふて飛行場に立たば男子に劣らぬ活動をなし、而して平常の服装に復らば立派な女性としての眞價に缺くることなき彼等にこそ近代女性の強さを見せられるのである。

四、青少年は常に向上心に燃え、一定の所に止まることを欲しない。本團グライダー部の物的充實の一步々々も換言す

れば彼等の向上に沿ふてなされたともいひ得よう。確固不動の訓練精神を堅持すると同時に常に進歩的に施設を充實することが必要である。

五、第一格納庫建設と同時に庫内に簡易ながらも修理施設をなしたるは成功といふべく、之によつて如何なる破損もすべて部員一同の手によつてこれをなし、一回も製作所の厄介になりたることなく、自分のものは自分で修理する習癖と同時に機體に對する愛護心涵養に役立たしめた點は大である。斯くせば修理費は實に五分の一乃至八分の一程度にて賄ひ得るのである。しかも機體の命數も倍に増して、本團に於てはプライマリーは二年乃至四年、セカンダリーは四年以上使用の記録を有したのである。

六、合宿訓練に於ては設備全般に亘りて部員以外の手を借りたることなく、機體整備は勿論、合宿所内の整理、食事の煮炊に至るまですべて實踐せしめた。これにより稍もすれば生活に對する感謝の念に不足する、都會人子弟を裨益するところ少なくなかつた。

七、合宿訓練は滑空技術のみに止らず練習生の凡ゆる面の鍛鍊に絶好の機會である。故に指導者はその期間はすべて練習生と起居行動を同じうして垂範に努力せしめたため効果も極めて大にして、各家庭より「グライダーに行くやうになつてからすつかり良くなつた」と感謝せられたことも二三に止まらない。

八、滑空訓練實施に當つて第一に留意すべきことは危険防止である。而して危険防止の要諦は周到適切なる計畫、完全なる整備、並に刻々變化する氣象に對する適切なる處置とが相俟つて、更に指導者、練習生が常に旺盛なる士氣を保持することである。この點に於て本團グライダー部が昭和十一年八月二日訓練開始以來人的に無事故たり得たことは大いに誇つてよいと思ふ。

九、人前に出て物の云へないほどの少年がグライダー訓練を受けてより急に活潑明朗になりし例、食物に對して好き嫌ひがなくなりし例、風邪を引かぬやうになりし例、規則正しくなりし例等は殆んどに見られたる好影響にして、特に學業成績が全員の中八パーセントまで向上してゐたことは特筆に値すると思ふ。又女子練習生が入部當時は蚊の鳴くが如き聲にて報告などの發聲をなせしものが訓練を積むに従ひ次第に力ある大聲となり、各人の滑空技術と聲の變化が並行したるは興味ある實例であつた。即ち男子に劣らざる發聲をなし得る女子練習生ならば安心して飛ばすことが出來得る技術になつてゐるのである。

一〇、本團グライダー部の訓練は日曜日祭日を之に充て、その他は概ね學期末休暇を利用して合宿訓練を行ひ來つたのであるが、斯くて一年間の訓練日数は通例七十日乃至八十日を數へた。蓋し一ケ年間中の日曜日祭日を無休にて訓練し來つた團體は少なく共過去に於ては本團以外には絶無であらう。而してこの日曜日祭日訓練に精勵したる者は、入部後一ケ年後に於て更に三週間前後の受験訓練を施せば二級滑空士になり得る技術の持主となつた。

一一、本團グライダー部に於ては自治費として月額五十錢の部費を徴收せる外一切無料とした。即ち一回搭乗幾何といふが如き料金制はグライダー訓練には絶対に不可なりと信じたるが故である。

一二、本團グライダー部練習生にして適齡に達したる者にして入營せざる者は一人もなく、三十名に達する入營者中殆んどが航空部隊に編入されて居り、所謂少年航空兵にも毎年四、五名採用されてゐる。而して彼等からは云ひ合せたるが如く「軍隊に入つて始めてグライダー訓練を受けてゐて良かったと身にしみて思ふ」と云ふ述懐の通信に接してゐるのである。

一二、練習生個々の性質に通曉するためには單に訓練のみに依りては不可能である。訓練以外の雜務、例へば滑空場の

整地、草刈、格納庫の整頓等に當らしむる場合、又は合宿訓練中の夜間等餘暇を利用して行ふ慰安の餘興等もそのためには大いに役立つてゐる。但し斯る場合に於ても指導者は常に彼等の仲間外にゐてはならぬ。一緒に歌も唄ひ詩も吟じ、又は土も運ぶ體のものでなくてはならぬ。しかもその中にありて明敏なる觀察を怠らなかつたならば、各自の眞の姿を明瞭に讀み得て指導上に大いに裨益されるのである。

一三、グライダーをやれば何かの役に立つとか、或はどれ位やれば滑空士になれるかといふが如き目先の功利を前提として入部するが如き者は必ず中途に於て挫折してゐるのである。幸ひ本團グライダー部に於て訓練せし練習生は大半が學生にして且つ概ね中流以上の家庭の子女なりしたため極めて質がよく、従つて指導上にもやりてやり甲斐ある感を有ち續けることが出來た。

一四、最後に本團グライダー部設立以來、松戸滑空場その他に臨場訓示又は激勵されたる主なる諸氏並に滑空指導に當られたる諸氏を記して謝意を捧げたい。(順不同官職等はその當時)

田中館愛橋博士 奈良原三次男爵 加藤尙雄海軍大佐 小野卯太郎陸軍少將 井上四郎海軍少將 小林喜一氏 眞崎甚三郎大將 西藤右衛門氏 草野忠右衛門氏 松島慶三海軍中佐 井上幾太郎大將 高橋常吉陸軍大佐 山田軍太郎陸軍少將 徳永熊雄陸軍大佐 松平俊子氏 竹内茂代氏 遠藤隆吉博士 東條政二團長 宮野忠男副團長 野溝光理理事長 磯邊鐵吉氏 小山永行陸軍大佐 關谷五十二氏 江木理一氏 松平翠氏 日暮豊年海軍少將 小川格氏 山田新吾氏 吉原清治氏 八田一二氏 升本清氏 藤井忠夫氏 別府景光氏 内田丈市氏 山口正氏 新堀巖氏 田中信一氏 利根川薫氏 粕谷芳夫氏 石井忠重氏 小島知永氏 松平和子氏 石井章雄氏 高瀬正夫氏 菊地敏夫氏 岸上秋雄氏 日向美智子氏 菊地増吉氏 島吉正氏 上出松太郎氏 織田貫氏 飯田量氏 田部賢次氏

感謝狀

大日本飛行少年團の受けたる感謝狀

感謝狀

今次事變ニ際シ出動軍隊慰問ノ爲恤兵品ノ御寄附
ヲ辱フシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス
昭和十四年七月

陸軍大臣 板垣征四郎

大日本飛行少年團殿

感謝狀

今次事變ニ際シ國防充實ノ趣旨ニ依リ献金ヲ辱フ
シ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス
昭和十二年八月

海軍大臣 米内光政

大日本飛行少年團殿

感謝狀

本會開設ニ當リ率先參加ヲ表シ優秀ナル國産品ヲ
出陳シ以テ銃後産業ノ振興ニ資セルノミナラス本
會ノ盛況ニ寄與スル所極メテ多大ナリ仍テ茲ニ本
狀ヲ呈シ深厚ナル感謝ノ意ヲ表ス

昭和十三年五月十九日

國民精神 國防大博覽會々長 勳三等 星野 錫

總動員 國防大博覽會總裁正三位勳一等公爵 近衛文麿

大日本飛行少年團殿

感謝狀

今次事變ニ際シ海軍將兵慰問ノ節ハ慰安ノ催シヲ
辱フシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス
昭和十五年三月

海軍大臣 吉田善吾

大日本飛行少年團
團長 海軍大佐 東條政二殿

感謝狀

本校收療中ノ今次事變戰傷病將兵ニ對シ親シク御
慰問ヲ賜リ洵ニ感激ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ
表ス

昭和十五年二月二十三日

感謝狀

陸軍軍醫學校長

陸軍々醫少將 桃井直幹

大日本飛行少年團殿

今般本院在院中の戰傷病者に對し御懇切なる御慰
問を忝うし感謝に堪へず患者一同に代り厚く御禮
申上候

敬具

昭和十五年八月廿六日

横須賀海軍病院長

大日本飛行少年團長殿

謹啓前略

今般團長殿を始め團員代表諸氏遙々當校に御光來

感謝狀

被下極めて御鄭重なる御慰問を辱ふし誠に有難く
奉深謝候

特に團長殿の御講話團員代表の慰問の言葉及び團
員御一同の慰問文及び圖書等深く當方一同に感銘
を與へ申候尙御持參のフィルムに依り生徒一同最
有意義に半日を過ごすを得申候事重ねて厚く御禮
申上候

向寒の砌團長殿團員諸氏の御健康と益々御發展被
遊やう御祈申上候

先は不取敢御禮申述度如斯御座候 敬白

昭和十五年十月十五日

東京陸軍航空學校長 河原利明

團長 東條政二殿

感謝狀

陸軍航空參考館創設ノ趣旨ヲ賛助セラレ當館ノタ
メ貴重ナル資料ヲ寄贈セラレタルハ誠に感謝ニ堪
へス

茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス

昭和十六年二月二十五日

陸軍航空士官學校長

陸軍中將從四位勳二等 寺倉正三

大日本飛行少年團御中

大日本飛行少年團地方本支部

大日本飛行少年團地方本支部は元より本團の分身として、本團の趣旨方針に則りて設置し、それら
その地方の特殊事情を參酌加味して活動し來つたもので、地方本部は大阪に、支部は京都、名古屋、岡
山、佐世保、北海道(旭川)、函館、神戸、静岡、岐阜、廣島、吳、横須賀、横濱、京城、大泊、其の他
數十ヶ所に有し、本團の目的使命とするところは着々成果を收めつゝあつたのである。

而して各支部共實施來つた主なるものを摘記すれば、航空講演、映畫、模型飛行機の普及、グライダー
訓練、飛行機同乗、少年航空兵志願獎勵、航空座談會等の航空思想普及事業並に青少年に對する航空
實地教育訓練にして、本支部幹部の指導よろしきを得、且つその熱意によつて擧げ得たる成果は實に甚
大である。

乃ち茲に全部の事業概要を詳記する必要あるも特に省略して大阪本部及び佐世保、北海道兩支部の三
者のみを記録してその功を彰することとした。

本團大阪本部

昭和十年 二月十一日大阪支部を大阪市に設置、同支部は直ちに本團の趣旨方針に則り事業を開始、四

地方本支部

月より本團の軍用機献納事業に呼應して近畿、中國、四國、九州、朝鮮、臺灣の全小、中等學校に對しこの運動參加を勧誘す。十月以降各所に於て航空講演並に映畫會を開催航空思想の普及に努む。

昭和十一年 一月以降軍用機献納運動を繼續す。十一月阪神沖に於ける大觀艦式を祝賀して同二十一日より二週間南海高島屋に於て開催されたる本團主催我等の大海軍展觀會に協力す。

昭和十二年 一月以降大阪市内各小學校に於て航空講演並に映畫會を開催す。九月十七日大阪支部を本團大阪本部に改組、本部長に海軍大佐吉見勇助氏を委嘱す。十一月三日飛行部發會式舉行、十二月グライダー部第一期生を募集す。

昭和十三年 四月九日グライダー部發會式を城東練兵場に於て舉行す。五月二十八日航空殉難勇士慰靈祭並に遺家族慰安會を開催す。六月十三日飛行部第一期生修了式及び第二期生入部式を舉行す。六月二十三日伏見宮家に刺繡額「水邊の虎」を献上す。七月よりグライダー部訓練を阪神飛行學校大正飛行場に移す。八月一日芝本秀三郎氏よりグライダー二機を寄贈さる。同日より一週間飛行部合宿訓練を大津海軍豫備航空團に於て、同月十二日より二週間グライダー部合宿訓練を大正飛行場に於て實施す。十月十五日より二週間南海高島屋に於ける本團主催輝く海軍大展覽會に協力す。

昭和十四年 三月八日本部長更迭し海軍少將三井清三郎氏新しく本部長に委嘱せらる。三月二十三日より五日間春季グライダー部合宿訓練を大正飛行場に於て實施す。四月二日グライダー部第二期生入部

式を翌三日飛行部第三期生入部式を夫々舉行す。五月七日出征軍人遺家族慰安會を開催す。五月三十日東郷元帥五年祭を執行す。五月三十一日海軍省より一三式水上練習機一機を下附せらる。七月四日より十二日までアベノ橋大鐵百貨店に於て輝く事變二周年記念少年航空展覽會を開催す。七月九日阪神飛行學校に於て關西學生グライダー大會を開催す。七月二十五日より一週間大正飛行場に於てグライダー部夏季合宿訓練を實施す。八月九日大阪府知事より淀川滑空場使用の件許可さる。十二月三日グライダー部第三期生入部式を舉行す。十二月二十四日より一週間京都府下玉水滑空場に於て冬季合宿グライダー訓練を實施す。

昭和十五年 一月二十一日皇紀二千六百年奉祝少年少女航空大會を天王寺公園運動場及び同音樂堂に於て開催す。二月十一日皇紀二千六百年輝く紀元節空中式典に参加す。三月二十日より一週間春季グライダー部第一次訓練を守口滑空場に於て實施す。同第二次訓練を三月二十九日より一週間京都府下玉水滑空場に於て實施す。四月十四日飛行部第三期生修了式及び第四期生入部式を舉行す。七月二十五日より八月十七日まで盾津陸軍飛行場に於て滑空士受験を目的とする合宿滑空訓練を實施す。八月十八日第二回關西學生グライダー訓練大會を盾津陸軍飛行場に於て開催す。八月二十三日グライダー部夏季合宿訓練を守口滑空場に於て實施す。九月二十九日紀元二千六百年奉祝航空三十周年記念少年模型飛行機競技大會を守口滑空場に於て開催す。阪口定吉氏よりグライダー二機を寄贈せらる。十一月

十九日海軍豫備航空團より一三式水上練習機一機下附せらる。十二月二十四日より一週間守口滑空場に於て第七回冬季合宿滑空訓練を実施す。

昭和十六年 一月二日より六日間守口滑空場に於て第八回冬季合宿滑空訓練を実施す。一月四日より一週間堺水上飛行學校に於て第二回飛行部合宿訓練を実施す。

本團佐世保支部

昭和十四年 一月十日大日本飛行少年團佐世保支部結成準備着々と進む。三月二日第一回模型飛行機競技大會を開催す。三月十五日より十日間熊本縣阿蘇山草千里にてグライダー合宿訓練を実施、参加者二十名。四月一日一四式西海型第一號機製作着手(佐世保支部西海中學校分隊)。五月二十五日佐世保鎮守府開應五十周年記念の佳日を下して、大日本飛行少年團佐世保支部結成式を舉行、本團より東條團長の來佐を願ひ盛大裡に舉行す、支部長に海軍少將菅沼周次郎氏を委嘱す。翌日海軍練兵場に於て佐世保鎮守府長官、飛行少年團員を視閲さる。尙結成式は當日を中央として前後十日間佐世保商業銀行に於て航空展覽會を開催す。特に展覽繪畫の部に長崎、佐賀兩縣下學童の應募せしもの千點を越え當地方航空思想普及上大いに資する所有り。八月一日より十日間福岡縣香椎滑空場に於て合宿訓練實施参加者二十名、酷暑の中技倆大いに進む。十二月二十一日一四式西海型第一號機製作完成命名式を舉行す(西海分隊)。十二月二十五日より二十九日まで佐世保重砲兵聯隊練兵場に於て合宿訓練を実施す。

昭和十五年 四月一日一四式西海型第二號機製作着手(西海中學校分隊)。七月十一日一四式西海型第二號機製作完了、製造検査合格特に試作機として翼布の代用に傘紙を使用し成績良好なり(西海中學校分隊)。七月十二日福岡より九大佐藤博教授、航空局坂本航空官の來佐を願ひ佐世保市公會堂に於て航空大講演會を開催、市内中小學生、一般有志多數聽講盛大なり、當地方航空思想の啓蒙に資する所あり、第二回模型飛行競技大會開催、一四式西海型第二號機命名式を舉行す。九月二十八日(航空記念日)福岡日日新聞社主催西日本滑空大會に出場、西海分隊大いに活躍す。十月一日文部省型一型滑空機製作着手。十二月十五日より二十五日まで長崎縣大野原陸軍演習地に於て合宿訓練を実施し参加者二十名、當地は最初の訓練であり零下數度酷寒中に良く其の滑空精神を發揮し良好裡に終了。

昭和十六年 一月十日福岡市前田航空研究所々長前田健一氏の來佐を願ひ滑空に關する講演並に映畫の會開催、小、中學生多數參集大いに滑空、航空に關する認識を得たり、目下西海分隊にて文部省型滑空機製作中近日中に完成の見込なり。

本團北海道支部

昭和十四年 十一月二十三日旭川市商工獎勵館に於て北海道支部結成せらる。支部長に越川喜久馬氏を

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------|----------------|---------------|-----------------|-------|--------|--------|--------|--------------|--------|-------|-------|-------|-------|------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 井山柳望村三三水松前松藤平西滑田瀧島三櫻熊鎌神川川川大 | 山口村生月田木井渡井原田井川 | 友八喜秀昇三高祐福謙文廣龍 | 楠左右浩治二清郎寔三郎治藏次一 | 嘉左衛門 | 智生義作次 | 儀武次 | 谷武次 | 川儀武次 | 島儀武次 | 三共俱樂部 | 櫻井惠賜 | 熊野賜 | 鎌田賜 | 神田賜 | 川西清兵衛 | 川本政一 | 川崎芳熊 | 大知新太郎 | | | | | | | | | |
| 川野兼三 | 川野眞太郎 | 勝部重右衛門 | 柴山篤雄 | 玉水弘 | 中島宗左衛門 | 中根貞彦 | 間宮壽人 | 酒造株式會社 | 宮崎誠作 | 森重五三郎 | 山本小四郎 | 小島德三郎 | 東洋ム會社 | 津村芳三 | 平尾正康 | 川島榮次郎 | 芦田利兵衛 | 伊藤長兵衛 | 石井和三郎 | 小尾實三郎 | 小田切延壽 | 川廷宗三郎 | 甲賀末次郎 | 佐々木國藏 | | | |
| 佐羽三郎 | 白波嘉明三 | 志波鷹治 | 宋銀春 | 友井春吉 | 堤清一 | 長井清一 | 森井清一 | 水原清一 | 堀江錦三 | 廣島の部 | 大村千代吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | 坂本常吉 | | |
| 赤澤仙太郎 | 加藤唯助 | 木下市郎 | 小寺頼次郎 | 渡邊頼次郎 | 大岡孫三郎 | 富岡徳平 | 山口徳平 | 貝島太市 | 日本漁船會社 | 井上隆一 | 高良宗七 | 島根の部 | 白石運市 | 愛媛の部 | 阿部秀太郎 | 高知の部 | 西内龜太郎 | 福岡の部 | 荒卷洋平 | 貝島文男 | 兒島桂三 | 谷玉一 | 原志免太郎 | 林昌治 | 眞鍋孝三郎 | 宮原義輔 | |
| 村上モト | 本吉俊治 | 城戸義之介 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | 藤田秀實 | |
| 臺灣の部 | 興業信託會社 | 臺北鐵道會社 | 林田末治 | 柳田悅耳 | 朝鮮の部 | 西同電氣會社 | 大同電氣會社 | 大日本飛行少年團本部職員 | 東京 | 京谷 | 榮 | 滿洲の部 | 森島宗作 | 鹿谷忱 | 土庫物會社 | 滿洲製糖會社 | 森川正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 | 諏訪部正人 |

大日本飛行少年團 卷末の辭

記述を了して卷末に顧みるに昭和七年本團が創立せられしより正に十年、幾度か難關に處し或は苦汗尙徒勞に終りし等の幾變遷有りしも、終始創立の趣旨を顯現するに全力を効して大過なく、聊かなり共航空日本建設上に寄與し得たるは、之偏に陸海軍當局を始めとし監督官廳並關係各位の指導後援の賜物にして衷心より感謝の意を表する次第である。同時に此度民間航空一元化の國策に順應して所謂發展的解消をなすと雖も過去十年間の歴史は必ずや永遠に輝ける事實として世の認むるところたるべく、同時に本團々旗の下によく本團精神を遵守且つ精勵し來り、將來大日本帝國の空の勇士たるべく努めたる團員諸君の報國の大作進はいよゝ力強く續けらるゝであらうことを確信してやまない。即ち茲に於て本團は今や胸底に残す何物をも有するものではない。光風霽月の感懷を以て近く生れ出でんとする大日本飛行協會傘下の航空青少年隊の健全なる發展を祈るのみである。

藤原航空局長官祝辭 (昭和十五年十一月三日於九段軍人會館本團大會)

大日本飛行少年團は、昭和七年十一月第二國民たる我青少年に對し、航空思想の普及涵養を圖る目的を以て創立せら

れ、爾來今年に至る迄九年間、輝かしき成果を挙げられ來つたのでありますが、今年は特に紀元二千六百年並に日本航空三十周年に相當し、且過般日、獨、伊三國同盟成立し、此の重なる意義深き年を祝すると共に、新體制下に於ける青少年の航空に對する一大決意を新たにせしむる企圖の下に、本大會を舉行せらるゝに至りましたことは、邦家の爲洵に心強く且つ欣快に存する所であります。

惟ふに、航空事業は單り人類文化發展の上に重要な價值を有する許りでなく、軍事上に於ても缺くべからざる使命を有することは今更茲に申述ぶる迄もない所でありまして、今次の支那事變に於て、我が忠勇なる陸海荒鷲に依り示されたる幾多の輝かしき戰果に徴するも瞭かなるものがあります。

今や我が國は世界史の一大轉機に際會し、大東亞永遠の平和確立の爲、國の總力を擧げて邁進しつゝあるのであります、之と併行して大東亞を一環とする航空圈の確立を期することも亦喫緊の要務であると信ずるものであります。

私は大日本飛行少年團首脳部が、夙に航空の重要性に着眼せられ、廣く青少年に對し之が知識を浸透せしむる爲、模型飛行機の製作に、或は滑空機の操縦に、或は飛行機の整備等航空思想普及に邁進せられ、克く今日の隆盛を來たしめられたる御努力に對し深く敬意を表しますと共に、將來の航空日本を双肩に擔ふ團員諸子が、愈々操守を強固にせられ、此の重大時局に處するの堅き信念を以て、我が航空界發展の爲奮勵努力せられんことを切望して已まない次第であります。

大日本飛行少年團拾年史

終

大日本飛行少年團拾年史
昭和十六年三月二十二日印刷
昭和十六年三月二十二日發行

昭和十六年三月二十二日印刷
昭和十六年三月二十二日發行

非賣品

編纂兼 野 溝 光
發行者 東京市芝區田村町一三飛行館内
印刷者 川 橋 源 三 郎
東京市京橋區築地一ノ一四
印刷所 仁川堂川橋印刷所
東京市京橋區築地一ノ一四

れ、爾來今年に至る迄九年間、輝かしき成果を挙げられ來つたのでありますが、今年は特に紀元二千六百年竝に日本航空三十周年に相當し、且過般日、獨、伊三國同盟成立し、此の重なる意義深き年を祝すると共に、新體制下に於ける青少年の航空に對する一大決意を新たにせしむる企圖の下に、本大會を舉行せらるゝに至りましたことは、邦家の爲洵に心強く且つ欣快に存する所であります。

惟ふに、航空事業は單り人類文化發展の上に重要な價值を有する許りでなく、軍事上に於ても缺くべからざる使命を有することは今更茲に申述ぶる迄もない所でありまして、今次の支那事變に於て、我が忠勇なる陸海荒鷲に依り示されたる幾多の輝かしき戰果に徴するも瞭かなるものがあります。

今や我が國は世界史的一大轉機に際會し、大東亞永遠の平和確立の爲、國の總力を舉げて邁進しつゝあるのであります、之と併行して大東亞を一環とする航空圈の確立を期することも亦喫緊の要務であると信するものであります。

私は大日本飛行少年團首脳部が、夙に航空の重要性に着眼せられ、廣く青少年に對し之が知識を浸透せしむる爲、模型飛行機の製作に、或は滑空機の操縦に、或は飛行機の整備等航空思想普及に邁進せられ、克く今日の隆盛を來たしめられたる御努力に對し深く敬意を表しますると共に、將來の航空日本を双肩に擔ふ團員諸子が、愈々操守を強固にせられ、此の重大時局に處するの堅き信念を以て、我が航空界發展の爲奮勵努力せられんことを切望して已まない次第であります。

大日本飛行少年團拾年史 終

製本控

912 冊 154 號 年 月 日

大日本飛行少年團拾年史

大日本飛行少年團編

備考

昭和拾六年八月四日

912
154

912
154

終